

洋の怒濤を瞰取すべく、颯風常に涼を送つて爽快云ふべからざるものがある。頂に一小祠がある。これは國王が久高島に祈をさしける爲の拜所である。頂より少しく下つた處に石門があり、門前に一對の石燈籠がある。門内に何等か祠堂があつたらしく、礎石かと思はれる遺址もあるが明瞭でない。創立は「球陽」に「尙眞王即位四十三年創造冕嶽石垣」とあれば、圖比屋武御嶽の石門と同時である。その後尙清王の時我が大永七年に祠堂を重修し道路を修築し松を栽えたので、今の石門もこの時の重修のまゝであると思はれる。

門の様式手法は園比屋武の門と全然同型であるが規模はやゝ小く、廣さ六尺八寸、深さ六尺、高さ七尺四寸、軒の高さ九尺四寸で屋根は唐破風造りであり、棟の兩端の虫吻、中央の寶珠、すべて園比屋武のものと同様であるが、彼に比すれば大體の鈎合も、細部の手法も、共にやゝ劣るかの感がある。辨ヶ嶽視察の日は高嶺首里市長自ら東道となり、數名の部下を引卒して晝餉の調度を持ち運ばしめたものである。門前の廣場の老松の下に陣取つて、ここに用意の筵を敷き、純琉球式の古雅なる行厨を開き、泡盛を酌んで、琉球料理に舌鼓を打つた心持ちはまた格別である。余は屢々遊山を試みたことがあつたが、この辨ヶ嶽の遊山の如く心から楽しく思つたことは稀有である。

琉球固有の神祠はこの外なほ澤山あるが、余は終に視察するの機會を得なかつた。聞く所によれば崇元寺の門前に浮繩美御神と云ふ靈所がある。これは神聖なる一區を三尺位の丸石を以て圍みその中は樹林であるが中央に岩があつて、これが禮拜の對象であるらしい。話の様子では内地の磯城神籬と類似の點もある様である。何れ後日實査した上で考へて見度いと思ふ。

琉球各地方にノロ殿内があることば既に述べたが、別に又一村に一ツのアシヤギと稱するものがある。これは床の高い建物で、上に神を祭り、村の祭事や重要な年中行事はこゝで行ふと云ふことである。若し然りとすればこれは現今安南に行はれて居る「廳」(Hall)の制度と全く同一である。廳は一村に必ず一ツあり、土地固有の神を祭る祠で、その前に拜殿がある。凡そ一村に關する事は、祭典、會議、その他何でもこの拜殿で神の御前で公明に行ふのである。安南と琉球と、夫は直接關係は無いかも知れぬが、或は何等かの連絡が無いとも限らぬと思ふ。

二十 陵 墓

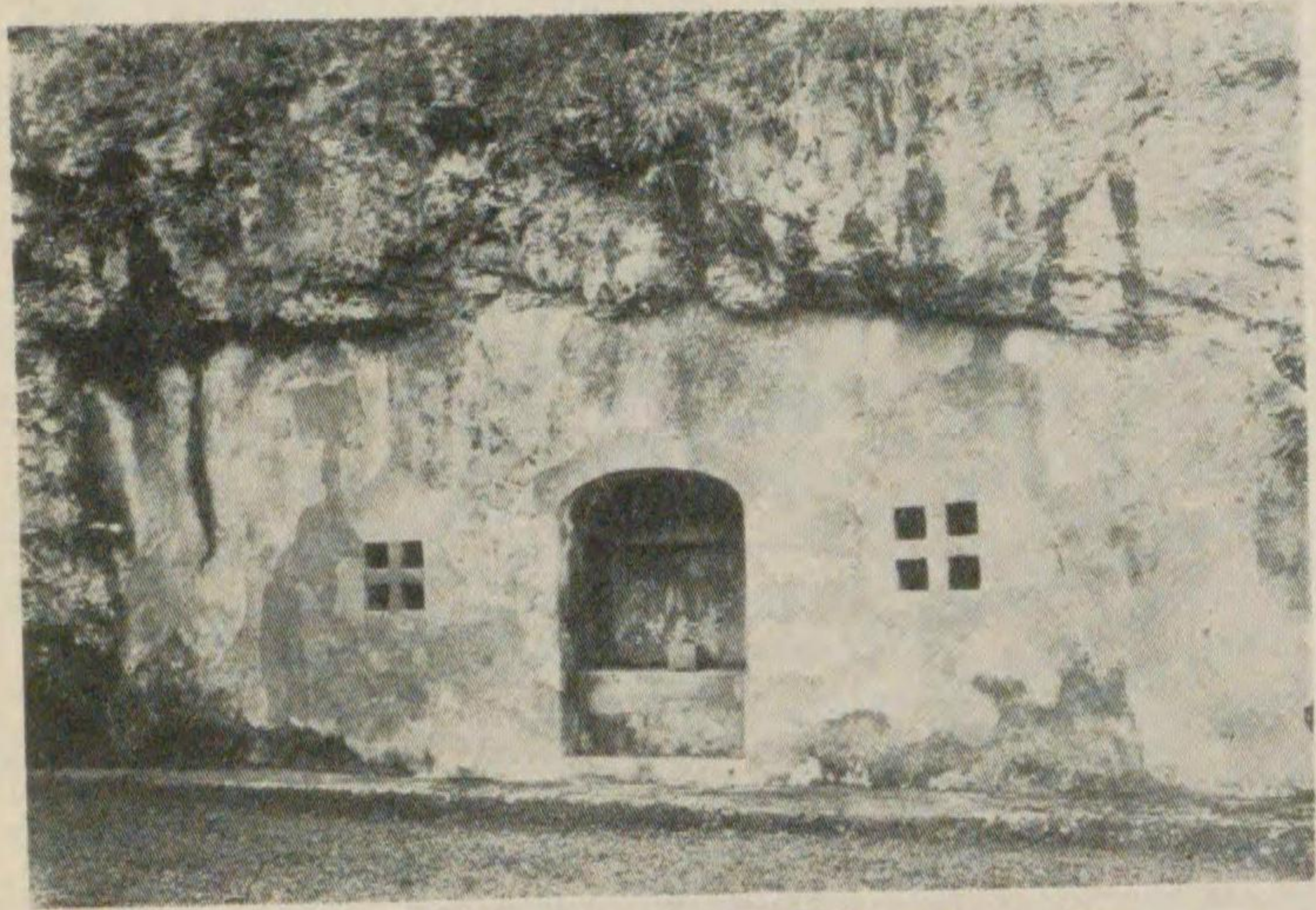
琉球の原始的葬法を考ふるに、その最初の風習は或は屍を野外に遺棄し或は屍を樹に引つ掛けて放棄したものであると思はれる。次に屍を地上に置いてその上に土を蔽ふの風が生じ、又次に屍

を木製の棺の中に収め、これを野外に放棄してその腐敗し終るを待ち、屍を洗つて骨を取り、夫を墓室の中に藏する様になつた。この風習は今もなほ久高島に保存されて居ると云ふ。屍を地上に置いてその上に土饅頭を作つた原始的の墓は今もなほ國頭郡に名護、運天地方に見ると云ふことである。今日一般に行はれる葬法は、先づ屍を墓室の中に入れて之を密封し、一年以上もその儘に放棄して置いて、再びその屍を取り出して見ると既に腐敗し盡して残るものは汚液と骨とのみである。そこで骨を洗つてこれを陶製の甕の中に入れ、更にもとの墓室の中に収めるのである。

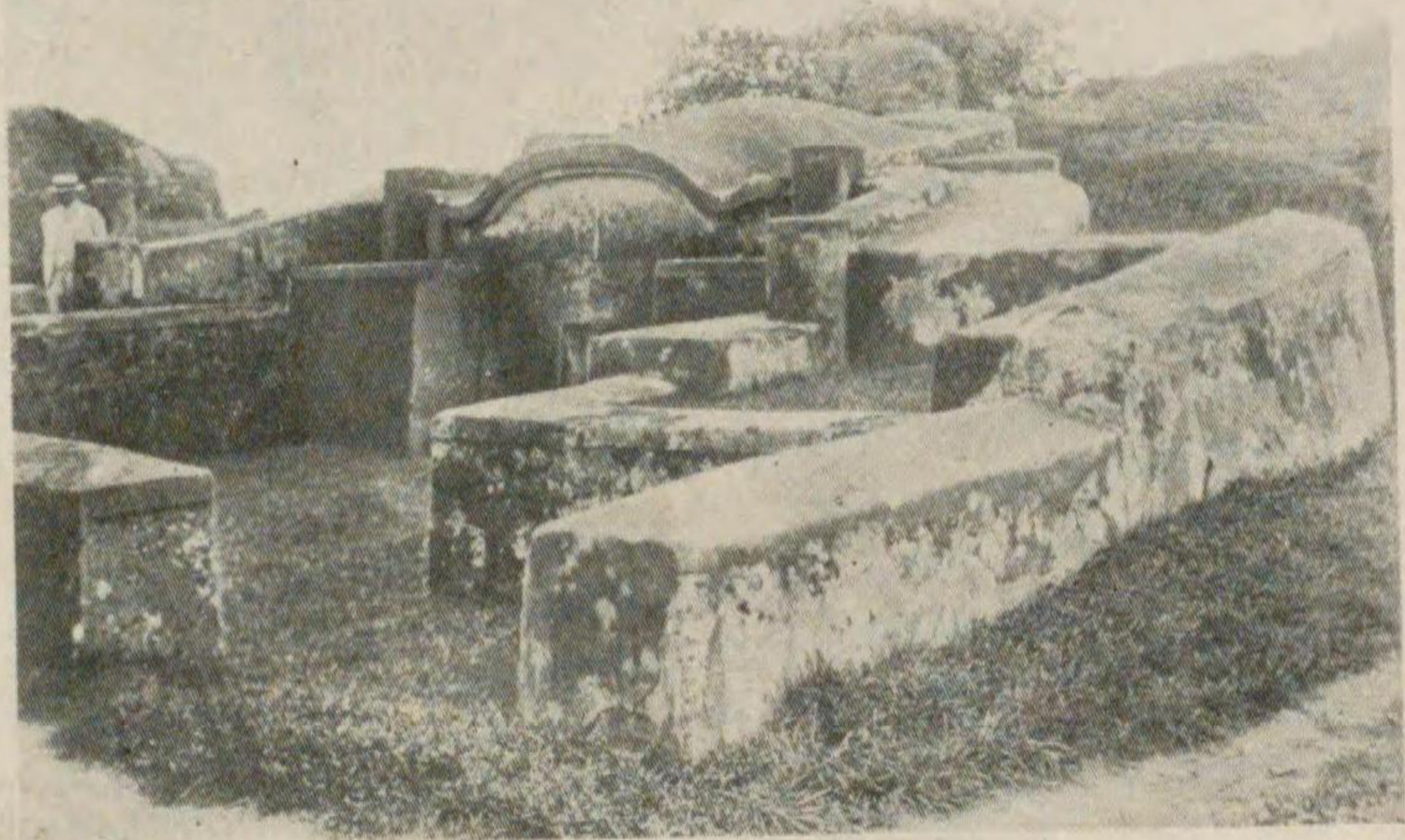
この墓室も始めは自然の洞窟が利用されたと思はれる。沖繩島の如きは全土悉く石炭岩から成るので、自然の洞窟が甚だ多く、墓穴として屈竟なものも少なくない。その後追ひ追ひ文化の進むに従つて墓室は人工的に造られ、終には壯觀眼を驚かす様なものも出来たのである。今その發達の順序に従つて之を分類すれば左の如くである。

- 一 横穴式
- 二 龜甲式
- 三 家形式

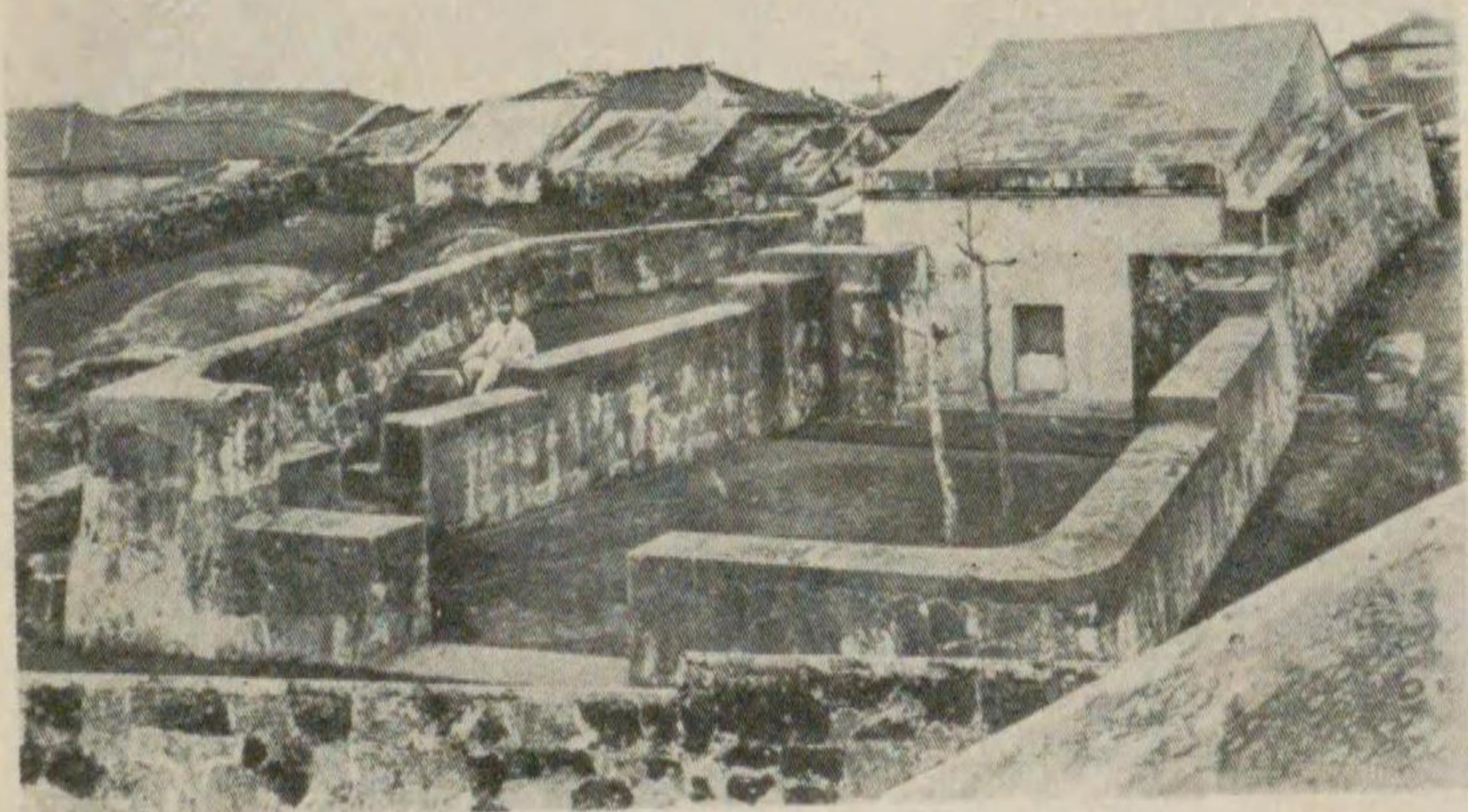
琉球の墓



上 横穴式 浦添の英祖陵



中 龜甲式 在那覇市辻原



下 家形式 在那覇市辻原 (圖中人物は著者)

これは眞境名安興氏の分類法であるが至極合理的であると思ふ。横穴式とは垂直なる岩壁面に横に墓室を穿つたものであり、龜甲式とは或は半岩壁内に室を取り、或は全く地上に墓室を築造し、その上に龜甲形の屋根を蔽ふたものであり、家形式とは龜甲式と同方針の設計であるが、たゞ屋根が一般建築物の屋根の如き形に造らるゝのである。勿論この外に多少の異例や、變態もあり、之を徹底的に調査研究することは餘程の大事業である。

那覇市の辻原には累々として無數の墓があるが其或者は横穴式であり、或ものは龜甲式或ものは家形式である。或は横穴の前に廂をつけたもの、或は横穴の前に半ば龜甲式の家根をつけたものもある。或ものは墓堂の前に廣庭を作り、庭を圍んで特殊の意匠を施した界壁を築いたのがあり、其調子が著しく支那の墓に似たものもある。こゝに掲げた寫眞はその實例で、横穴式のものには浦添の英祖陵であり、龜甲式と家形式のものは辻原に於けるものである。

元來墓室の形は女胎に象ざると云ふ説がある。即ち墓室は女人の胎内を意味し、墓室の入口の門戸は女陰に擬したので、人は女人の胎内から女陰を通して産れるにより、死後は再び元の胎内に還ると云ふ理想だと云ふが、恐らくは後人の附會の説であらう。

歴史的に重要な陵墓は浦添の英祖陵及尙寧王の陵、首里にある尙巴志王の陵（これはなほ疑問であるが）、及び首里城下の玉陵である。前三者は横穴式に属するが玉陵は特殊の設備に成る築造的のものである。

玉陵は正しくは靈御殿と書くのであらう、尙家歴代の陵で、文龜二年に尙眞王が父尙圓王の遺骨を改葬する爲に創建したのである。尙圓王は始め文明八年に「みあげ森」に葬られたのだつた。その後規模は次第に擴張せられて今日に至つたので、大明弘治十四年九月に建てられた玉陵碑に

（上略）この御すえは、千年萬年にいたるまで、このところに、おさまるべし。もしかに、あらう人あらば、このすみ見るべし。このかきつけに、そむく人あらば、てんにあをき、ちにふして、たゝるべし。（下略）

とあり、子々孫々永くこゝに葬らるゝことになつて居る。

規模は甚だ宏大で、門を入れれば墓堂の前の廣庭は一面に清淨なる各種の珊瑚の細片を以て敷きつめられてある。墓堂は半ば自然の岸壁に據り、半ば壁前に築造され、内容は見ることが出来ないが、外觀は二室連続した姿で、實に堂々たる構へである。

堂の一角の塔の如き屋上に何やら獅子の如き怪物が立ち、遙かに岩壁の上にも不思議な動物の彫像が立て居る。鬼氣身に泌みる閑寂の裡に一種の神秘的なる魔力がひしくと人を襲ふ様な氣分である。何等建築としての奇も巧もないが、隨かに崇高偉大なる建築である。

浦添の陵墓は別に後章に記述することとして茲には省略するのである。

二十一 邸宅

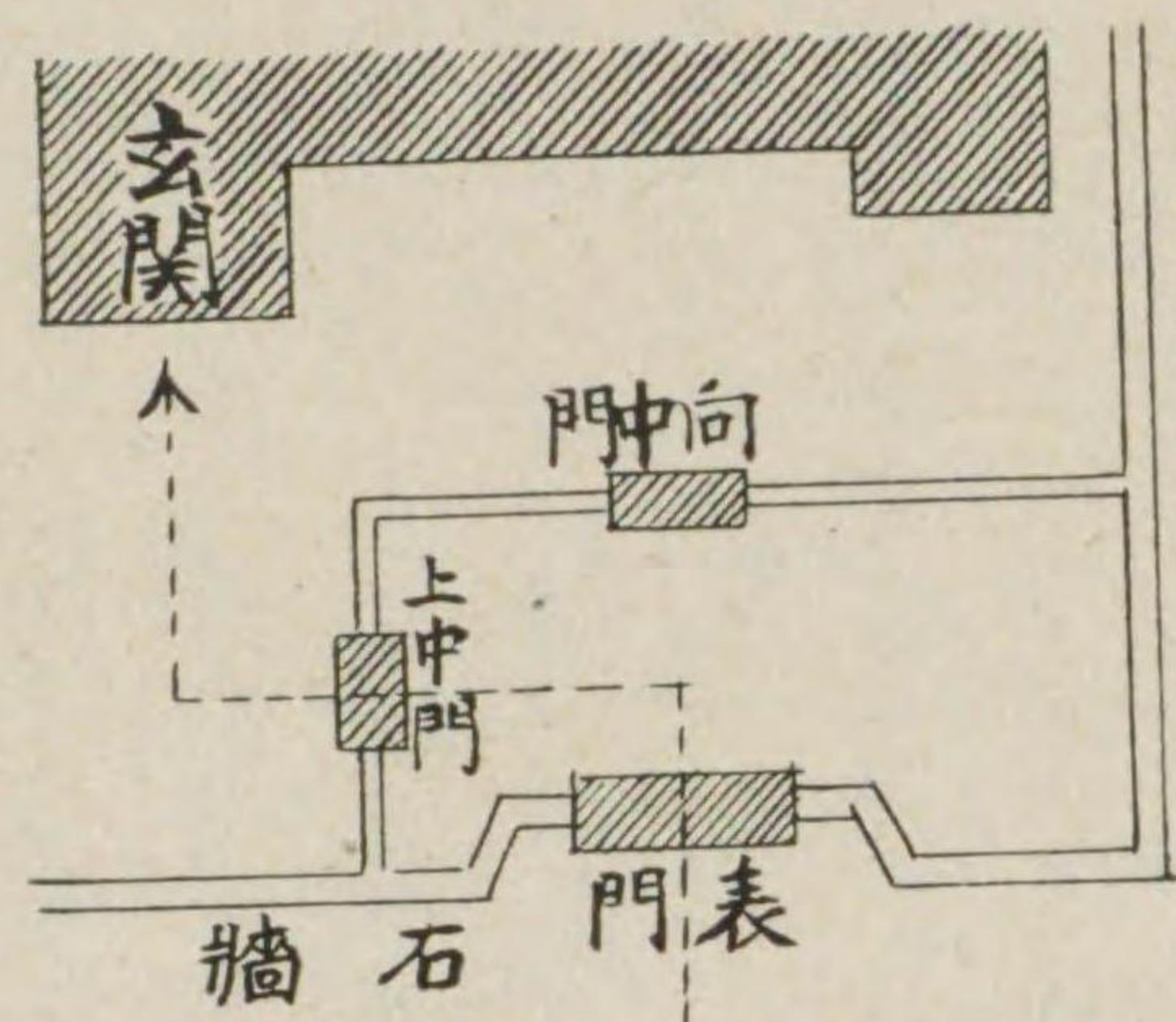
琉球の上流邸宅は、曩きに尙侯爵家や尙男爵家の例に由て知らるゝ通り、大體に於て日本内地の「主殿造」乃至「書院造」の調子を帯びたものである。恐らくは鎌倉室町時代の遺風を傳ふるものと解するものが妥當であらう。一般邸宅の構へは、前面の石牆を袴腰の形に内方に凹まし、その中心に表門を開く表門を入ると石牆で圍んだ廣場があり、正面には「向中門」があり左手には「上中門」がある。常住の出入には表門を人りて左に折れ、上中門を経て又右折して玄關に至るので、向中門は特殊の場合にのみ開くのであると云ふ。この趣向は内地の主殿造の構へに似た處もあり、又城の櫓形に似た點もあると思ふ。邸宅内部の間取りの詳細はまだよく知らないが、一般に前面左の隅に玄關を取りその右に座敷、又その右に奥座敷を配置し、後方に居間、臺所等を接續する方針であると察せられる。

普通住宅以外の儀式的建築、例令ば官公衙の類は漢式に據るものが多い様に思はれる。曾て冊封使の公館として那覇に置かれた大使館の如きは、その目的上當然な事であるが、全然支那式の建築であつた様である。「琉球國志略」所載の繪から、そのプランを作つて見ると左の如くなるが、これは支那の公館と云ふよりは寧ろ衙門に近い配置である。型の如く門前の街路を柵を以て遮斷し、坊門を設け旗竿、六角亭、影屏を備へて居るが、旗竿の上には冊封と大書した大旗を繙へして居る。第一門の左右に番所を對立し、曲牆を以て連續して居るなごも支那趣味である。門内の左右の建物は扣所の類か。天澤門内の一廓の左右四對の屋宇は屬僚の執務する處、長風、停雲の二堂は重層の大建築であるが、冊封の正使副使の居る所であらう。中央の敷命堂は即ち正廳で、冊封使が公務を執り或は琉球の大官と會見する所であるに相違ない。

曾て首里に在つた大美御殿も古圖の示す所によれば全然漢式のプランであり、型の如く正廳、左右配房、門が均齊に配置されて居る。大美御殿とは琉球國王が父の喪中に居住する所で、その期間は百ケ日であつたといふ。

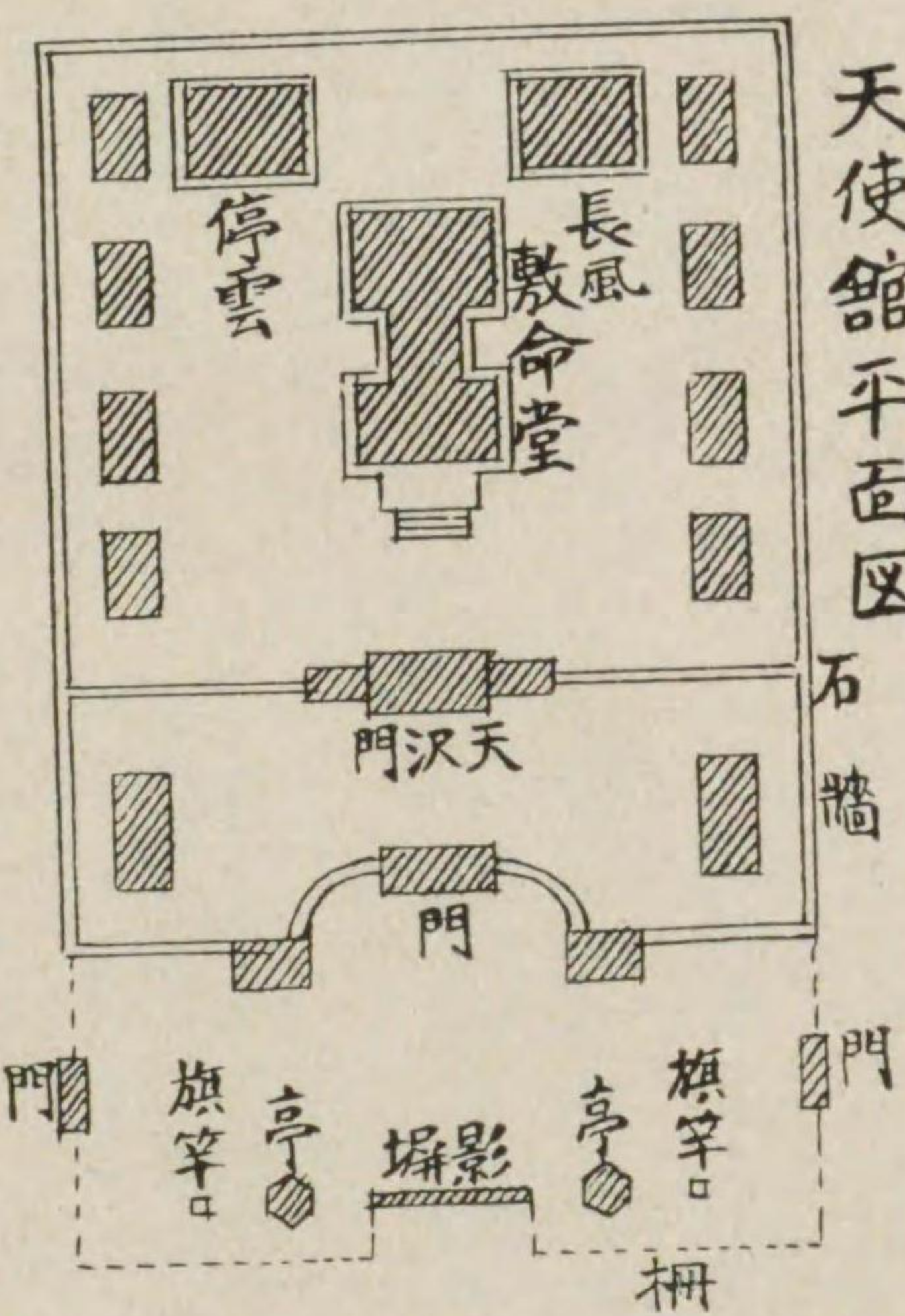
國王の離宮に重要な例が二ツある。その第一は首里の崎山にある東苑で、小高い丘の上に南面し

琉球の邸宅

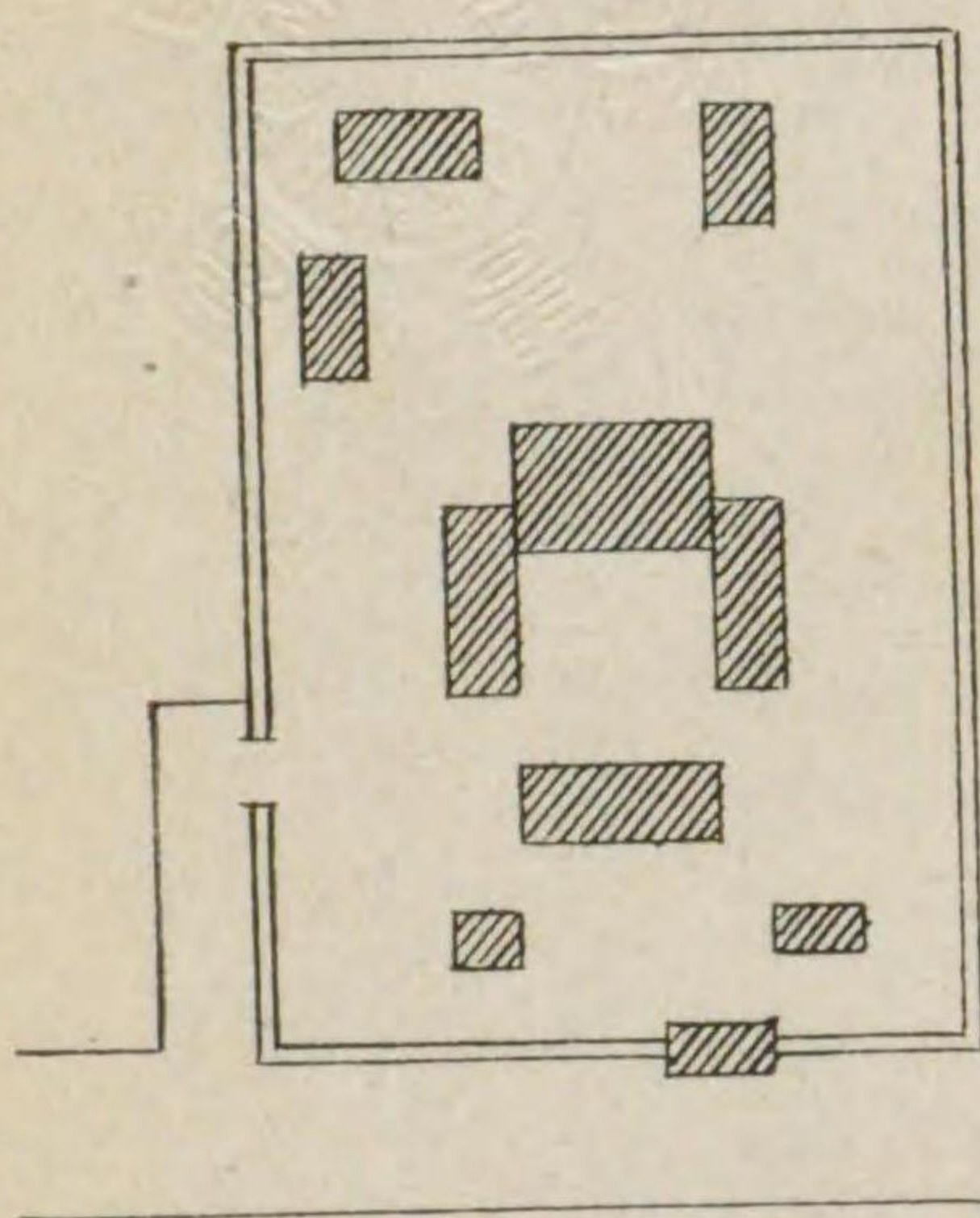


上流邸宅の構へ

大使館平面図



大美御殿平面図



て造られた庭園内の小宇である。此處から南方を展望すれば、島尻郡の全部が一眸の下に瞰取され、しかも海が見えないので、狭い沖繩島でありながら、何となく大陸らしい気分である。建築は瀟洒なる茶席的の様式構造であり細部の趣向も中々面白いが惜むべし甚だしく荒廢して居る。今にして之を修理しなければ終に崩壞して仕舞ふのである。琉球全盛の時代には冊封使は必ず此處に招かれて饗應を受け、献酬の間に詩を賦し文を屬して清遊を試みたのであつた。

東苑の亭は普通「御茶屋」と呼ばれ、又「崎山御殿」とも云はれ、慶長年中始めて喜安入道が茶道職となつたと云ふ。「茶屋ぶし」と云ふ琉歌に

拜てのかれらぬ 首里天きやなし

遊でのかれらぬ 御茶屋御殿

と云ふのである。東苑八景と云ふは、東海朝暎、西嶼流霞、南郊麥浪、北峯精翠、石洞獅蹲、雲亭龍澗、松徑濤聲、仁堂月色である。石洞獅蹲と云ふのは、亭の傍の巖窟の内に巨大な着色の石獅が一つあるので、頗る美事なものである。もと一對あつたのであるが、その一つは今は無。大さは約五尺許り、これが余の觀たる琉球に於ける最大の石獅である。

第二の離宮は識名園の中にある。識名園は琉球第一の名苑であるが、これは後章に記述する。建築は堂々たる大規模で、普通の邸宅の型に由て居るが、その手法に面白く碎けた處があり、庭園とよく調和して居る。その身舎の外に廂を取り、又その外の土間に孫廂を取つた處なごは限りなく面白ひ。しかも孫廂の柱は自然の立木を利用し、根の張つたまゝを礎石の上に立てたもので、一は柱の安定に有利であり、一は外觀に雅趣を添ふるに宜しく、誠に巧妙な考案である。余は此の如き手法を未だ何處にも見たことが無い。

二十二城 堡

琉球には古城堡が澤山ある。これは多くは地方の按司の居城であつたので、何れも要害の地に石壁を築き、その中に邸宅を構へたものであつた。就中有名なのは首里城を始めとし、中城、浦添等であるが、首里城のことは既に記述した、中城と浦添のことは後章に譲り、こゝにはその他の二三の例を紹介する。

那覇には港口を夾んで北に「三重城」、南に「やらざ」が對峙して居る。これは港を防禦する爲に築いたもので、倭寇に備へたのだと云ふ。三重城には今も望樓が聳えて居り、「やらざ」は全く廢墟にな

つたが石壁に銃眼の設備が残つて居る。市内奥武山公園の西端に「御物城」と云ふ高閣があるが、これは城の構へであるが、實は王家の貿易品の倉庫である。

地方の城堡で歴史的興味の多いものは勝連城である。これは中頭郡勝連村の南風原の南に珊瑚礁の丘上に屹立した城塞で、約五百年前、尙泰久王の時勝連按司阿麻利が築いたのである。彼は北谷間切屋良村の産で、諸處流浪の末、勝連按司の秣莉に住み込み、終に按司を滅ぼして自ら之に代り、威勢國王を壓するに至つたので、尙泰久王はその女を妻せて彼の觀心を買つた位である。彼はその後叛逆に問はれて誅せられたが兎に角琉球第一流の英傑であつた。「おもろ」に彼を詠じた歌がある。その一節に

かつれんは なおにか たとへる
やまとの かまくらに たとへる

とある。勝連は何に譬へん、日本の鎌倉幕府に譬へんとの意である。

座喜味城は中頭郡讀谷山村の座喜味の後方なる高地に築かれたもので、周圍百七十一間、高さ二丈餘の石壁を圍らし眺望の絶佳を以て稱せられて居る。これは中城按司護佐丸が讀谷山按司たりしとき

築造したもので、約五百年前の遺跡である。

國頭郡で有名なのは今歸仁城である。今の名歸仁村にあつて、琉球に三山が分立して居た頃山北國王の居城として築かれたので、山北王朝は四代九十一年間こゝに居つて、中山、山南と覇を争つたのである。城は海拔二百尺の丘上にあつて、三重の石壁を圍らし、周回十餘町、面積五千九百十五坪ある。なほ今歸仁城下の下田原に唐船畑と云ふ處があるが、これは三山鼎立時代に支那の貿易船の碇泊した港であつたのが、滄海變じて畑となつたのである。

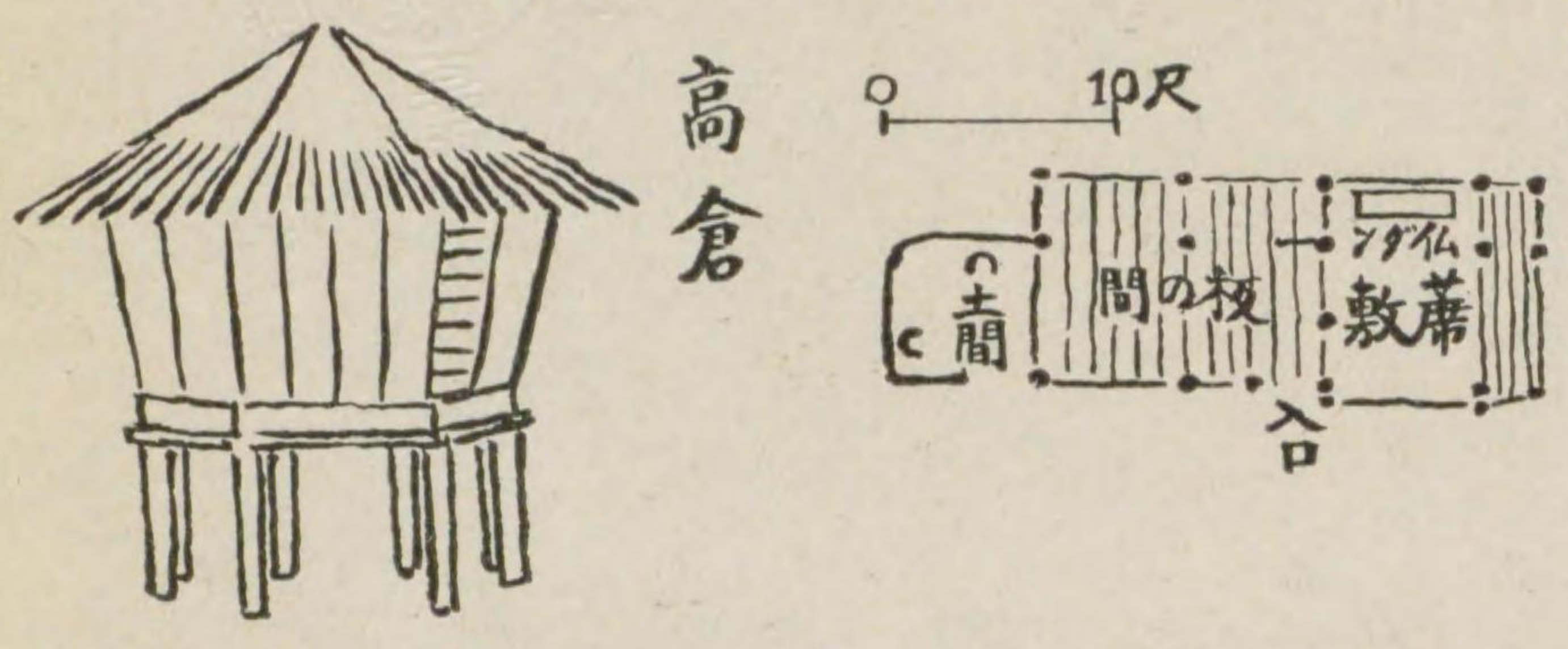
國頭郡の南端に山田城址がある。今恩納村に屬し、殆んど廢墟になつたが中城接司護佐丸の父祖以來の居城で、山北の侵入を防ぐべく國頭の咽喉を扼する爲にこゝに築城したものである。

二十三 農家

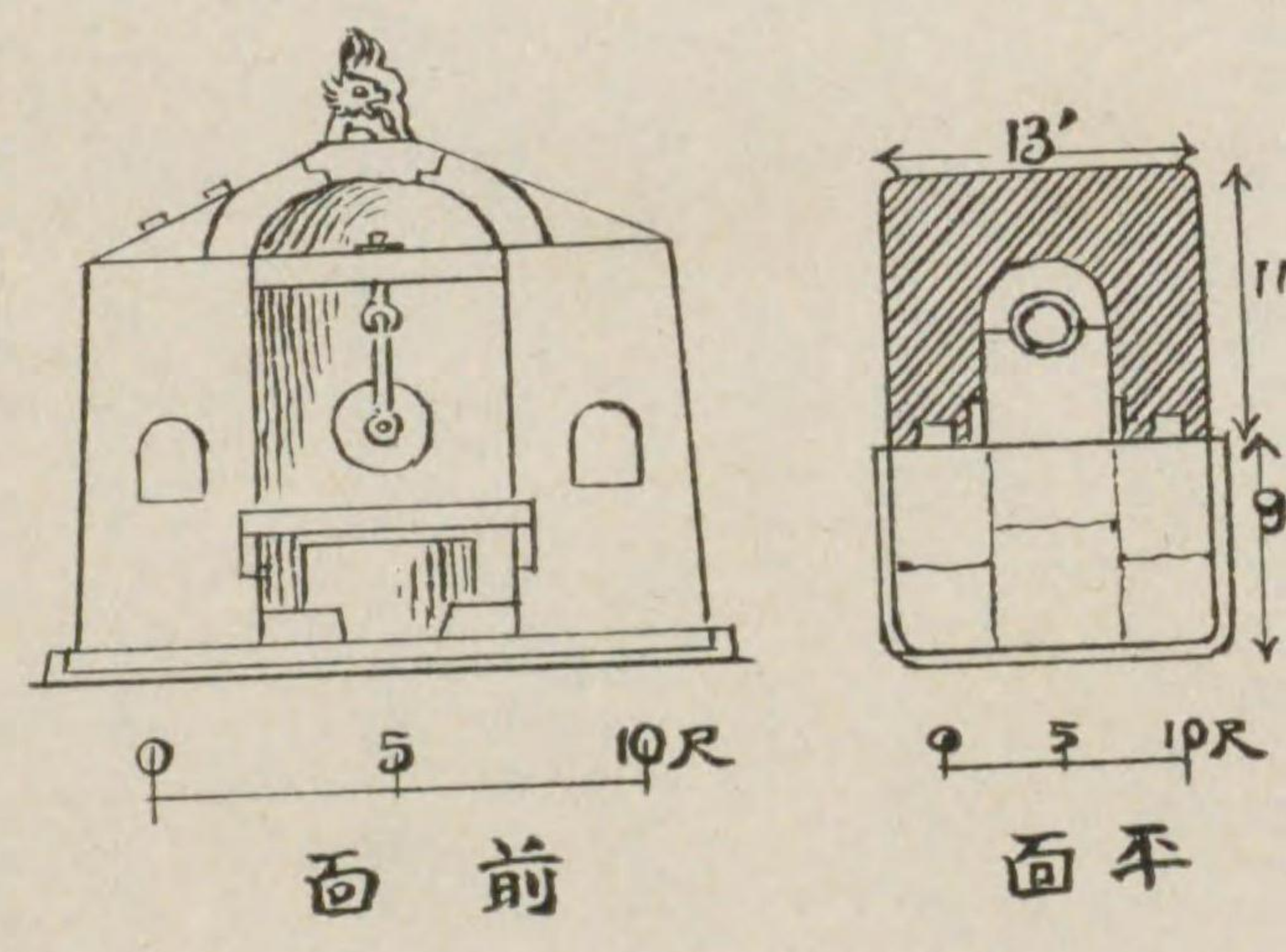
農家の建築は琉球の古代住家の倣を存するものである。その體裁は、先づ敷地の周圍に生垣又は竹垣の類を繞らし、その内に矮小なる單層草葺の小屋を造つて居るが、最低級のものには垣の無いものもある。家は最も原始的なるものは泥を以て壁體をつくるが、やゝ進んだものは竹を網代に編んで壁とし、更に進んだものは板を用ふるのである。柱は雜木を不定の形と大きさに割つたもので勿論鉤掛けな

琉球民の家

首里附近農家



井戸の図



ぎはしない。その柱の頭部を薄く平たく作り出してV字形に切り缺くので、つまり柱の上部はV字形をなすのである。その切り缺きの溝から溝に桁を架け渡し、棕櫚繩でからげるので釘は用ゐない。床は地上一尺以内の高さで、丸太を地に並べて板を敷き、その上に吳座を敷くので畳は用ゐない。入口には引き戸をつける。

竹壁は最も普通に行はれるが、これは細い竹五本位をならべたのを單位として編むので、壁の内外に張り、その中間には茅をつめ、繩を以て内外の網代を緊縛するのである。

家の大きさは九尺四方を單位とし、最小級のもは只一室のみであるが、必ずこれに同大の土間が附属する。土間には竈を据へつけ、煮焼の設備をする。やゝ手広い家は二室を連続するが、この場合には一室が蓆敷で他室は板敷である。別に物置用の納屋糞溜等が之に附属する。最下級の家には押入戸棚等の設備もないが、先祖の位牌壇だけは必ずある様である。

農家に於て米穀を貯蔵する爲に造る高倉と稱するものは非常に面白いものである。これは四角六角八角等の多角形の建物で、床を高くし、建物に應じて四柱六柱八柱等を立て、床下は吹き抜きである。屋根は方錐形で茅葺である。その全體の調子は内地の校倉にも似て居るが、更にアイヌの倉に酷似し

南洋の住家にも似て居る。

こゝに圖する所は中山傳信録の米廩の條に圖解してあるものに據つたので八柱の高倉である。同書に記する處は左の如くである。

藏米廩、亦懸地四五尺、遠望如草亭、下施十六柱、柱間空處、可通人行、上爲版閣、官倉皆如此、

村民或數家共爲一亭、藏米其中、分日守望

高倉が琉球の古代から存在して居た證據には、之に關する神話又は傳説が語り傳へられて居るのである。球陽卷一、察度王記の中に左の天女傳説がある。

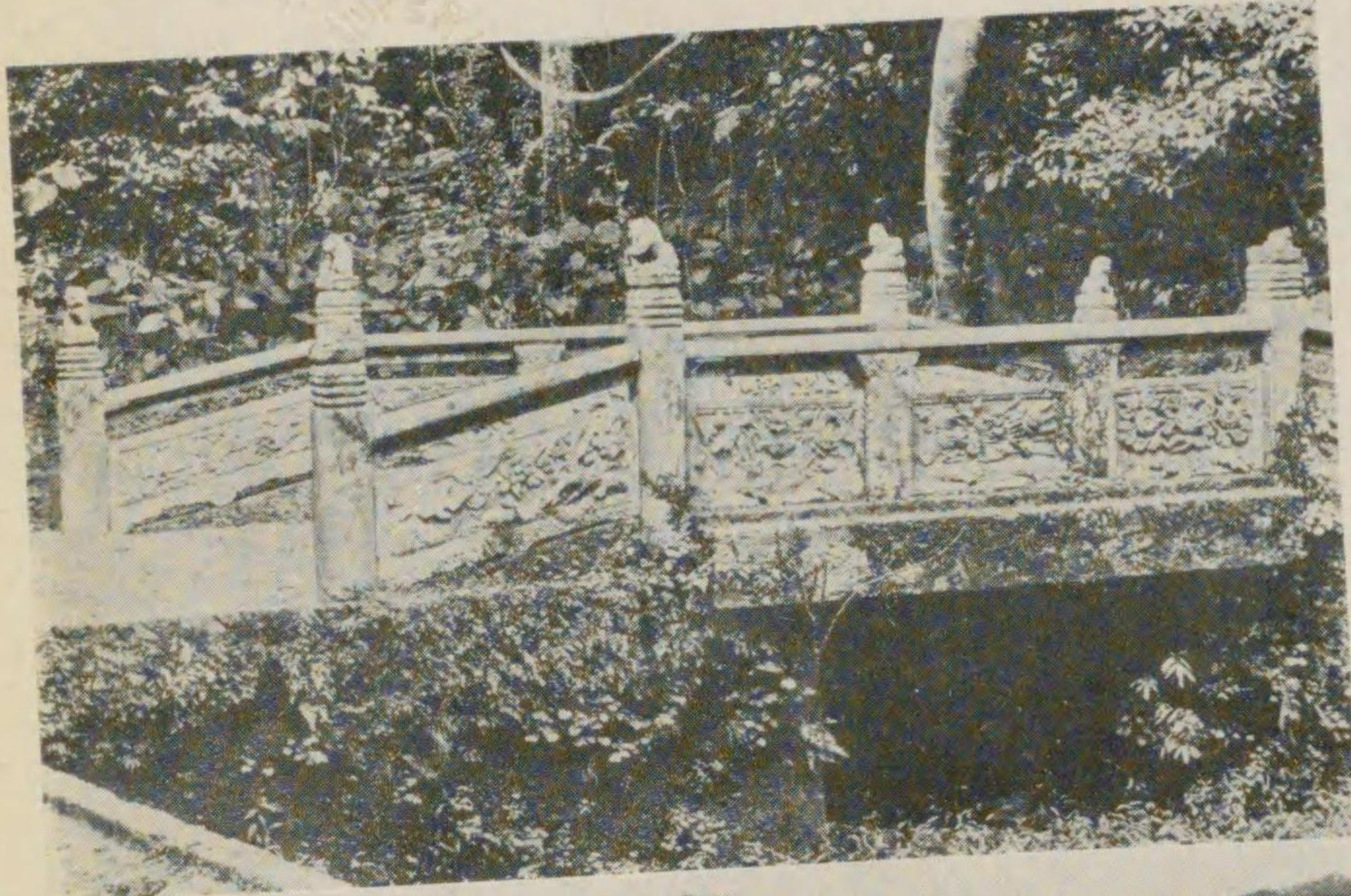
……且歌曰、母之飛衣、在六柱倉、母之舞衣、在八柱倉、母聞大悅、窺夫亡、登倉視之、果藏于櫃中、以稻草蔽之、即着飛衣而上天……

又球陽の尙眞王十年の記事にも同じ天女傳説があるが、その文は左の如くである。

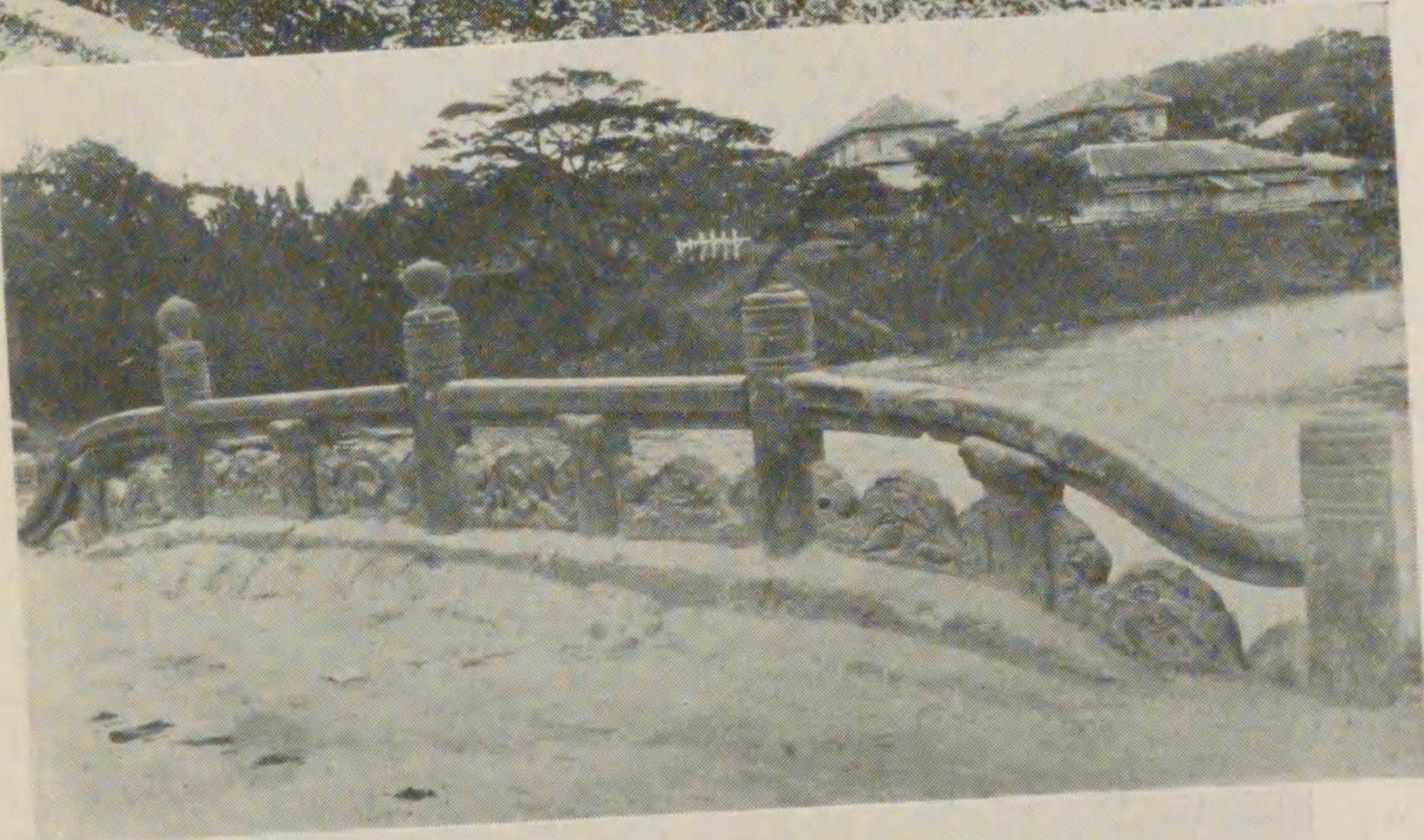
……已歌曰、母之飛衣、藏之于稻草之中、隱在六柱倉要、母之舞衣擲在八柱倉内、蔽之于粟草之中、……

この傳説には日本の羽衣の傳説と類似の思想が現はれて居ると思ふ。

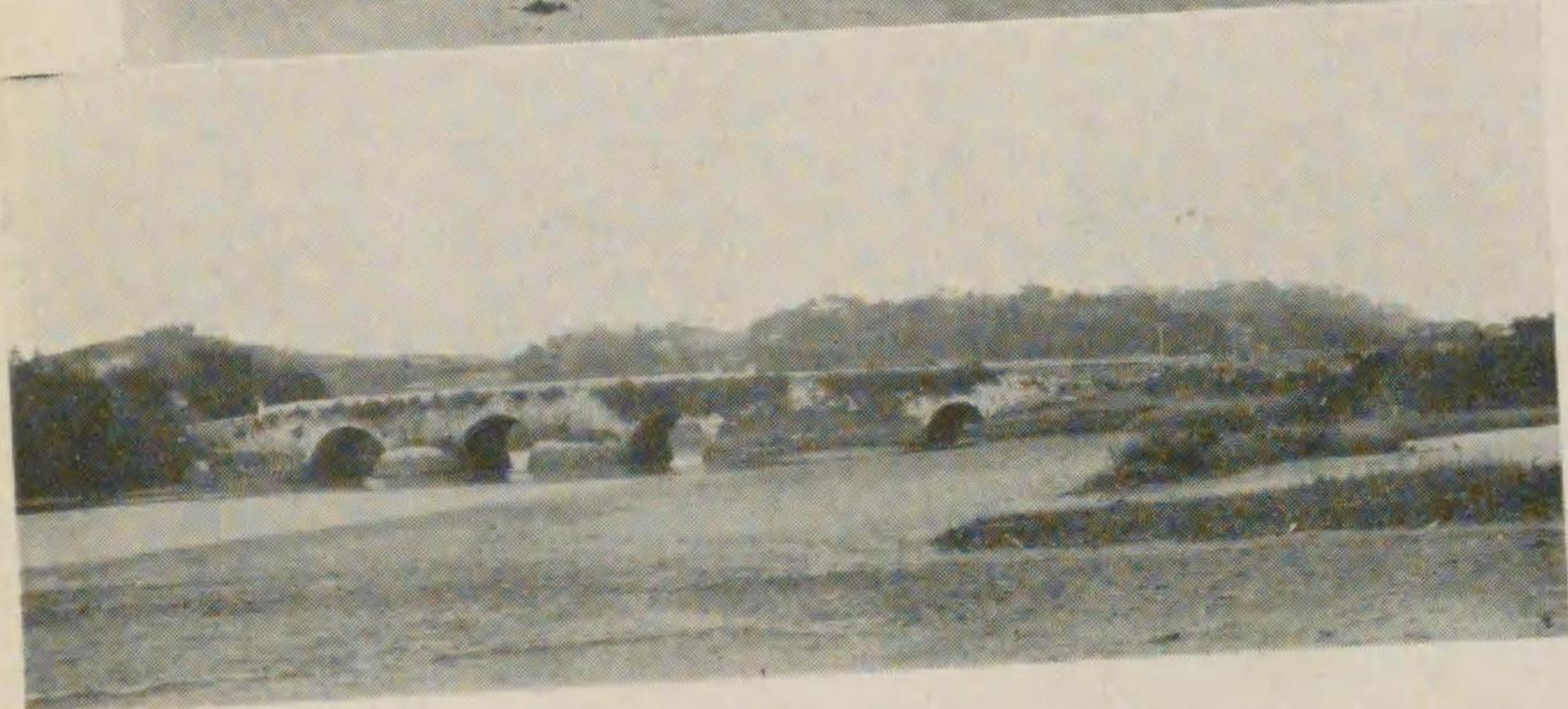
琉球の橋



上 圓覺寺放生池の橋



中 首里市世持橋



下 眞玉橋

高倉は琉球の各地方及離島にも存在して居る、但しその形式には互に小異がある。徳の島、永良部島に於けるものは沖繩に於けるものよりは屋根の勾配が急であると云ふことである。

二十四 橋

琉球の橋にも奇巧なもの優秀なものが少なくない。首里の圓覺寺の放生池の橋や、圓鑑池の觀蓮橋のことは既に記述したが、これと同系に屬するものに世持橋がある。これは首里の龍潭の北口にある石橋で、その勾欄には例の如く支那趣味の賑やかな彫刻があるが、柱の頭は日本趣味に富んだ擬寶珠形であり、爰にも和漢混用の手法が見へる。

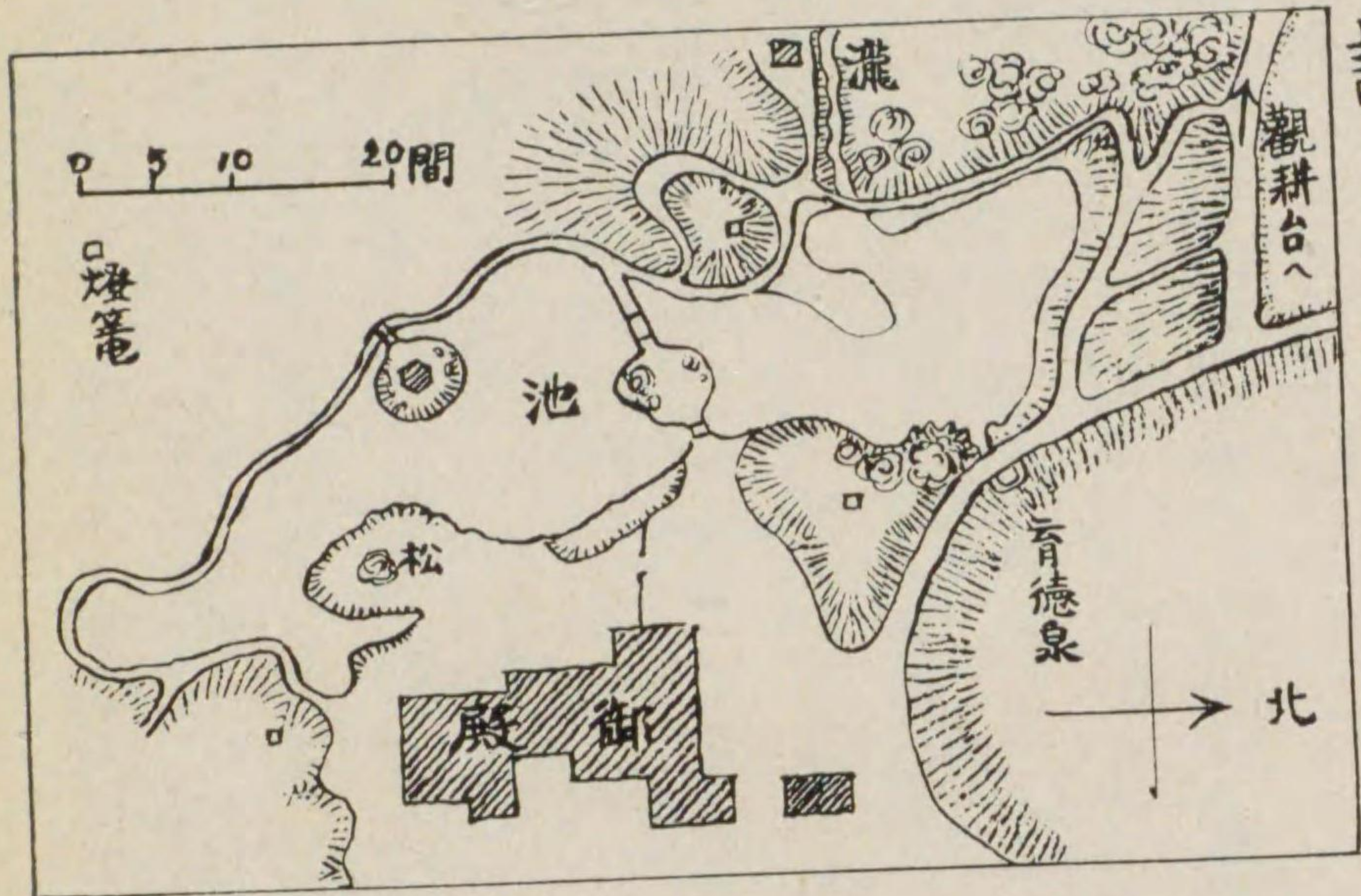
琉球第一の名橋は、那覇港口から深く灣入した那覇江即ち支那人の所謂漫湖の東端に注ぐ一水に架けられた眞玉橋である。この橋は大永二年に尙眞王が創建したもので、始めは五つの木橋であり、中央を眞玉橋、南を世持橋、北を世寄橋と云ふと記録されて居るが、その他の名は傳はらない。享保三年尙敬王のとき今の石橋に改築したもので、長さ約二十一間餘、幅約二間の大きさであるが、其形が如何にも美しい。下に三拱を架し、上に質素な欄をつけた丈で、裝飾は全く無いが、その無裝飾で、只だ線の運用丈で技巧を現はした處に限りなき妙味がある。この點は丁度崇元寺の門と同じ精神で

ある。その線の働きを觀察するに、第一に橋の長、廣、高の比例が恰も適當である。三拱の形は半圓に近いがやゝ扁平で、その曲線が美しくしてしかも力がある。拱の空間と壁面との面積の比例も誠に美しく、爲に橋に堅實の觀を與へる。橋の上面は極めて微に凸曲線を描いて居るが殆んゞ氣が附かない位であつて、これが人に得も云はれぬ快感を與へる。石の大きさ、その積み方も雅致に富んで居るが強固の感に充ちて居り、見れば見る程心持ちのよい橋である。

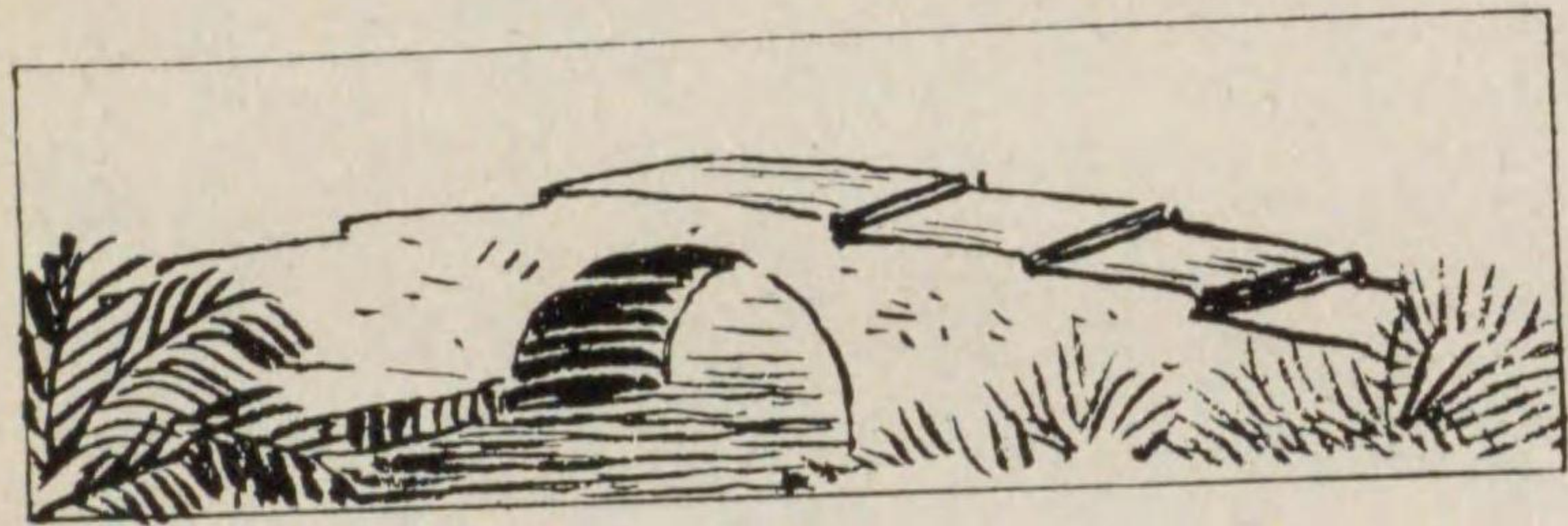
之を人に譬へんか、これ猶ほ紅粉を装はずして自ら妍なるが如きか。或は又赤裸々にその筋骨の理想的に整へるを示す勇士の如きか、外貌の秀美と内容の力の美とを兼備するもの、余眞玉橋に於て之を見る。奇を衒ひ、巧を弄し、彫鏤傳彩を事として俗眼を欺かんとする建築は、この橋の前に愧死せざるを得ないのである。

那覇の市中にも幾つかの美しい橋があるが、その最有名なるは美榮砦である。これは享徳元年に尙金福王の建立であると云ふ。その他崇元寺前に崇元寺砦、その下流に泊中砦、泊高砦がある。市を貫く堀には、前記の美榮砦の外に、板砦、御成砦、泉崎砦、松田砦、旭砦、月見砦等がある。港南垣花町に通ずるものは北及南の明治橋であるが、これ等は橋としての價値は乏しい。

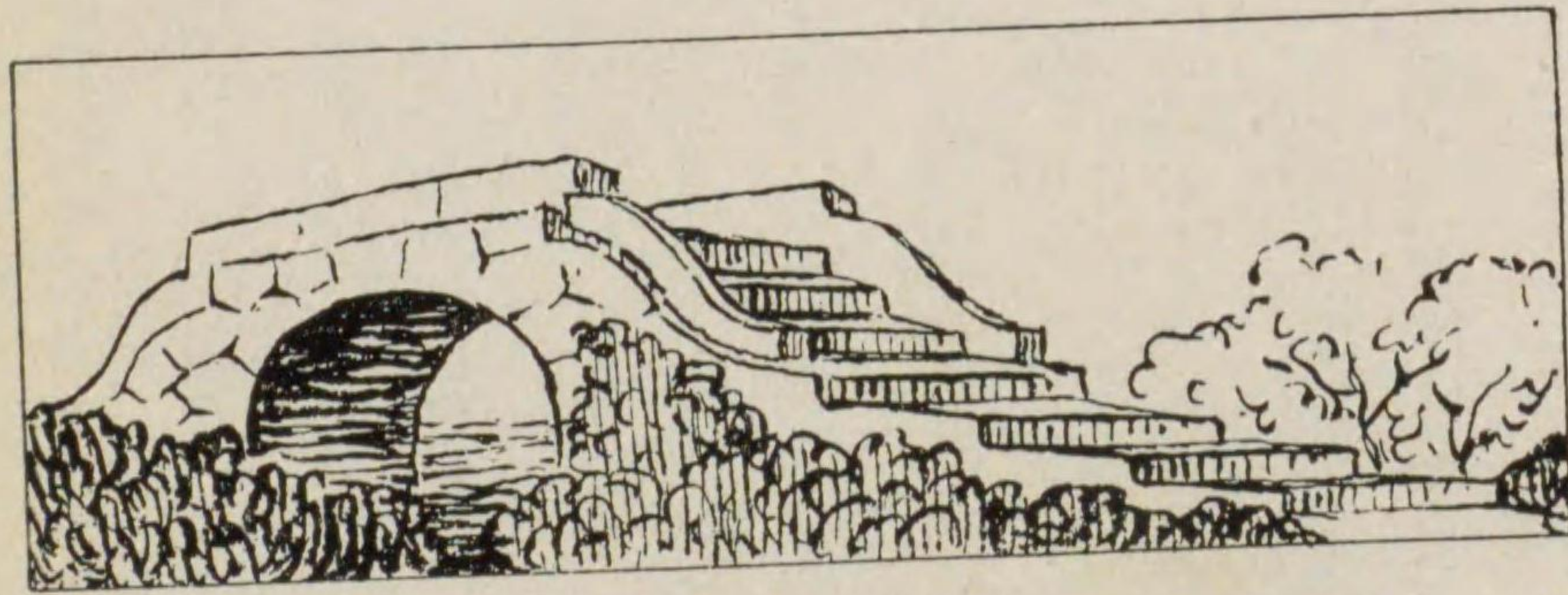
琉球の庭園



識名園觀測図



識名園内の橋



識名園の橋

二十五 庭

琉球に於ける第一の名苑は、首里城南の離宮識名園である。また南苑とも稱せられて居るが、その規模は、こゝに余の踏測した略圖に示すが如きもので、大體に於て、内地の室町時代に大成せる庭園法に準據したものと見られる。先づその中心となる池は、所謂心字の池から脱化したものと解すべきであろう。池口は育徳泉と名くる自然の湧泉であり、池尻は西の方に落ちる瀧であり、共に鬱蒼たる樹林を以て蔽はれて居る。中島は二ツある。北島は東西二橋を以て陸に連結し、池を兩斷して居る。南島は橋を以て一方の陸に通じ、こゝに風雅な六角亭がある。建築物は池の東にある離宮の屋舎及その附屬建築、瀧の傍に瀧見の小亭がある。離宮のことは前章に紹介して置いたから茲に再説しないが離宮の座敷から庭園を見た時の調子は非常に美しい。先づ左手に洲瀆形に突出した半島に、第一の役木として枝振りの面白い老松が蟠つて居る。夫から眼を右に轉じて行くと、中島の六角亭が来る。更に右に中島と橋が現はれるが、視線の角度が都合よく橋の輪廓を見せる。夫から右は小丘連續し鬱々たる樹林生ひ茂り、池はその裾に灣入してその涯を見せない處が甚だ面白い。隨所に燈籠が配置されて居るが、何れも奇巧である。橋の形も甚だ支那趣味に富んで雅致がある。

庭の西北隅に高臺があり、そこに一小亭がある。名けて觀耕臺と云ふので、こゝから島尻郡の殆んど全部が觀望されるので、沖繩に於ても有数の風景の絶佳な地點である。育徳泉には一種の淡水藻が茂生して居るか、珍しい特種のものとして、史蹟名勝天然紀念物保存會で之を指定したと云ふことである。

那覇市の奥武山公園も觀るべきものである。これは那覇港の深く灣入した漫湖の上に浮ぶ島であり其西端は南北明治橋に由て陸に續いて居る。長さ約四百七十間、幅の最廣約百二十間、園内には老松龍の如く鳳の如く、奇趣云ふべからざるものがある。園内に龍淵寺と云ふ寺がある。これは享保の頃、波上宮の護國寺に居つた心海僧正と云ふ名僧が建立して隱棲したのである。

二十六 美術及工藝

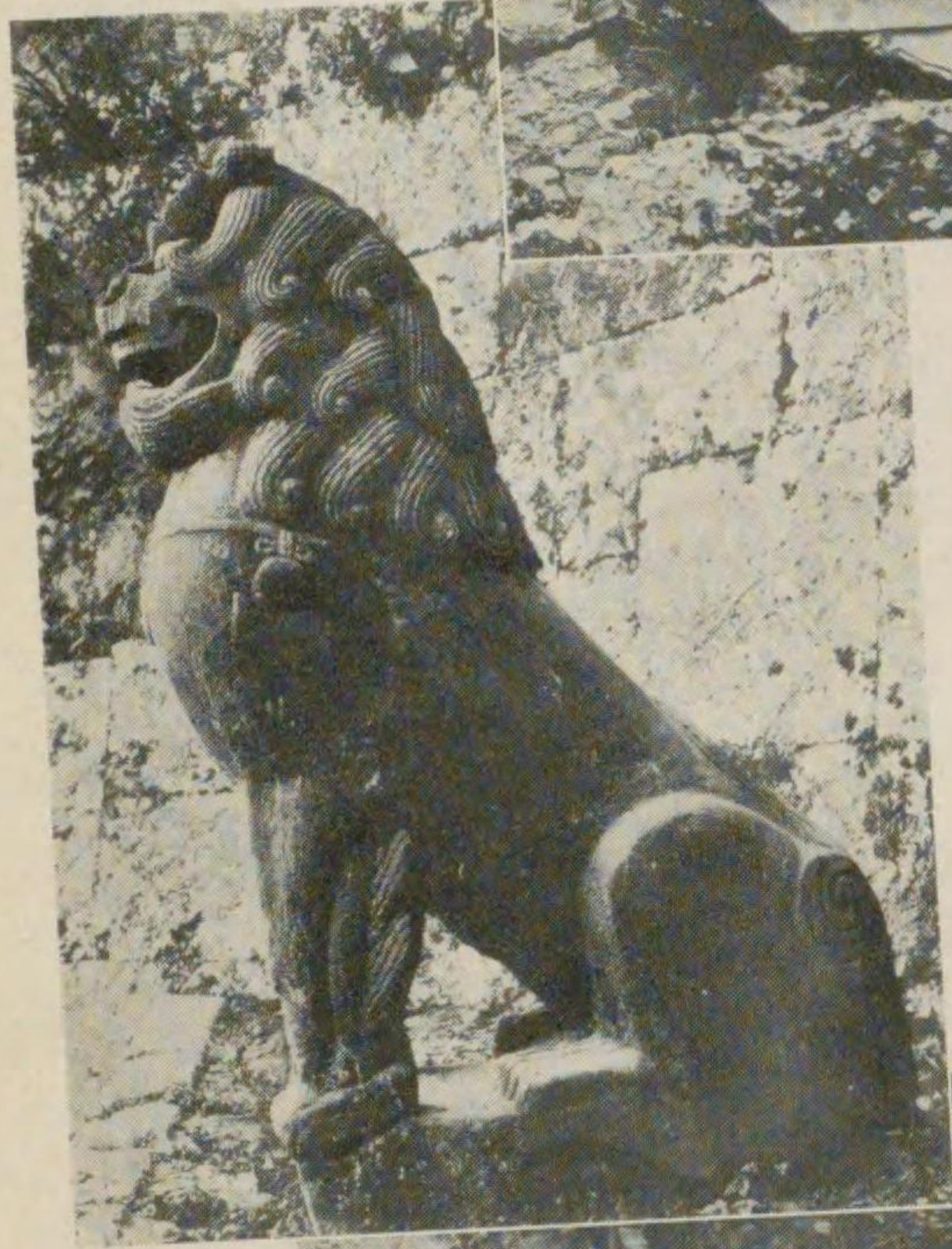
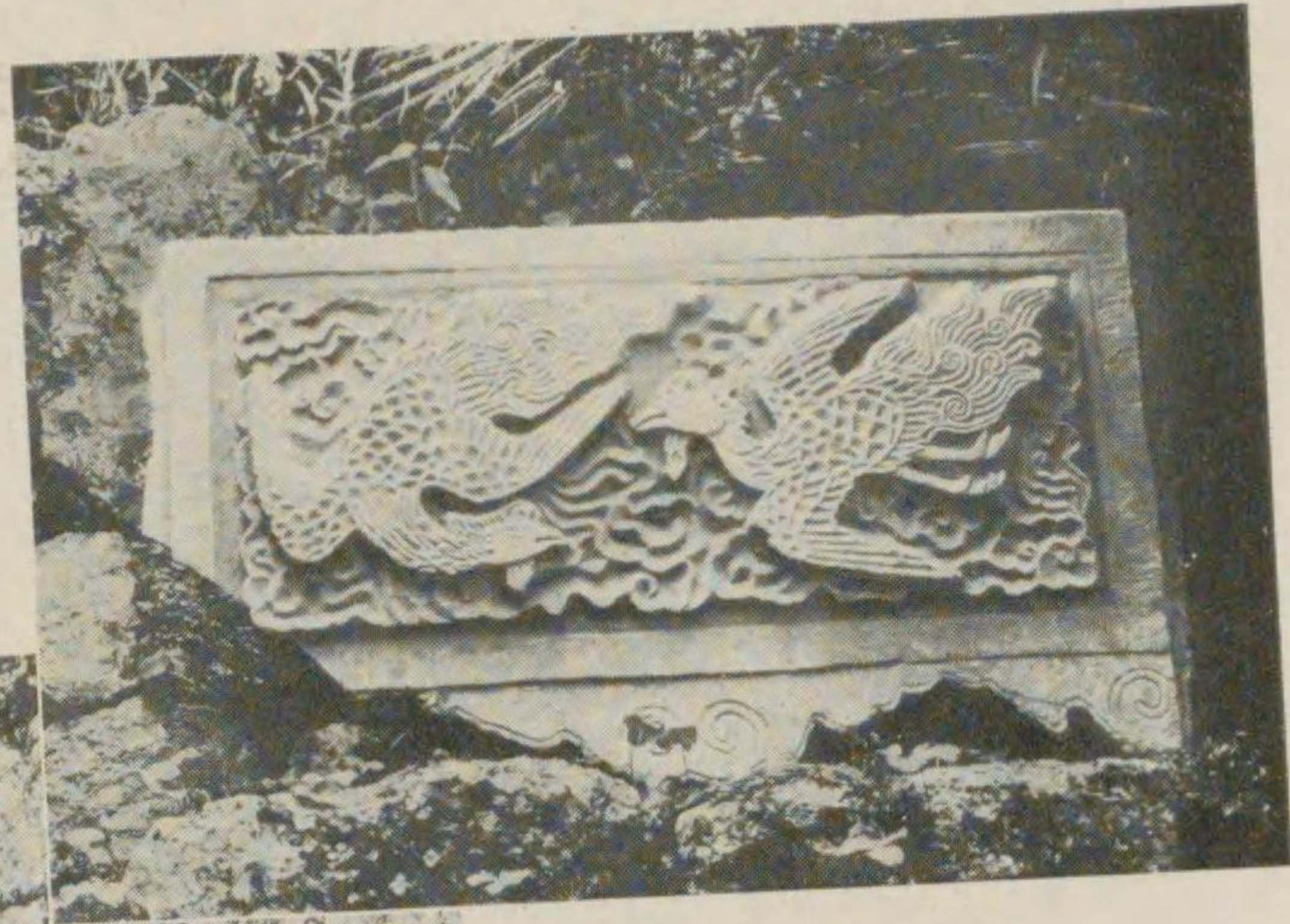
序に琉球に於ける美術及工藝に就て少しく紹介して置き度い。

第一に繪畫であるが、琉球の繪畫の系統は大別すれば二つの流派に分かれる。第一は支那系で、宋元明の傳統であり、第二は日本系で、鎌倉室町の繪卷、下つて桃山江戸の浮世繪の傳統である。その中支那系のものには非常に優秀なものがあるが、夫は琉球の畫聖自了及その衣鉢を傳へた殷元良に由

て開發されたものである。

自了は欽氏城間清豊と云ふ人で、慶長十九年十月十八日に生れ、正保元年十月十八日に三十一歳で死んだ。彼の一生は甚だ短かつたが、其製作は今も可なり多く存在し不朽の名を傳へて居る。彼の畫は宋元の風格を傳へたもので、筆力が甚だ強銳である。寛永十年尙豊王の冊封使杜三策が來たとき、王が自了の畫を示して留題を求めた處、彼は大に驚いて、之を顧虎頭、王摩詰に比して讚美したと云ふ。又同年徳川家綱の誕生を祝する爲め、金武王子朝貞が江戸に使ひした時、自了の畫三幅を狩野安信に見せた所が、彼は大にその筆致に感服し、自了若し本邦にあらば、我之を友とせんと言ふた。自了はこの時僅かに二十歳の青年であつたのである。高士逍遙の圖は彼の傑作であるが如何にも高雅であり同時に雄健である。余は何處となく南宋の梁楷の氣分があると思ふ。殷元良は座間味庸昌と云ふ。享保三年に生れ明和四年に死んだ。彼は山口保房(吳師虔)に師事したので、山口は支那の福州で繪畫を學んだのである。彼は十二歳の時より城中に召されてその天才を成就したが、琉球で畫家を尊重する様になつたのは彼の風格と技倆とに基つくと云はれて居る。神猫圖は、蓋し彼の傑作で、氣韻漂渺として遙かに毛益の俛を見るの思がある。

上 首里観蓮橋の石欄



中 首里城歡會門の獅子



下 首里観蓮橋の石欄

琉球紀行

日本系の繪には、余は不幸にして未だ驚歎に價するものを見ないが、近頃の筆になる風俗畫稿を見るに何れも純真なる構圖と運筆とを示し遠く數百年前の古調の漂ふを見るのは誠に興味多い事實である。

彫刻に關しては繪畫の様に傳記が詳でないが矢張り自了を以て祖として居る。併し自了以前に既に幾多の建築的彫刻が存在して居るのでその淵源は甚だ遠いのである。首里城歡會門前の石獅の如きは恐らく門と同時代の作(文明九年)であろうが實に立派なものである。大體に於て支那氣分であるがその力強い姿態、大膽なる手法、何處へ出しても引けを取らぬ傑作ではないか。この外之と伯仲の間にある實例はなほ少くない。

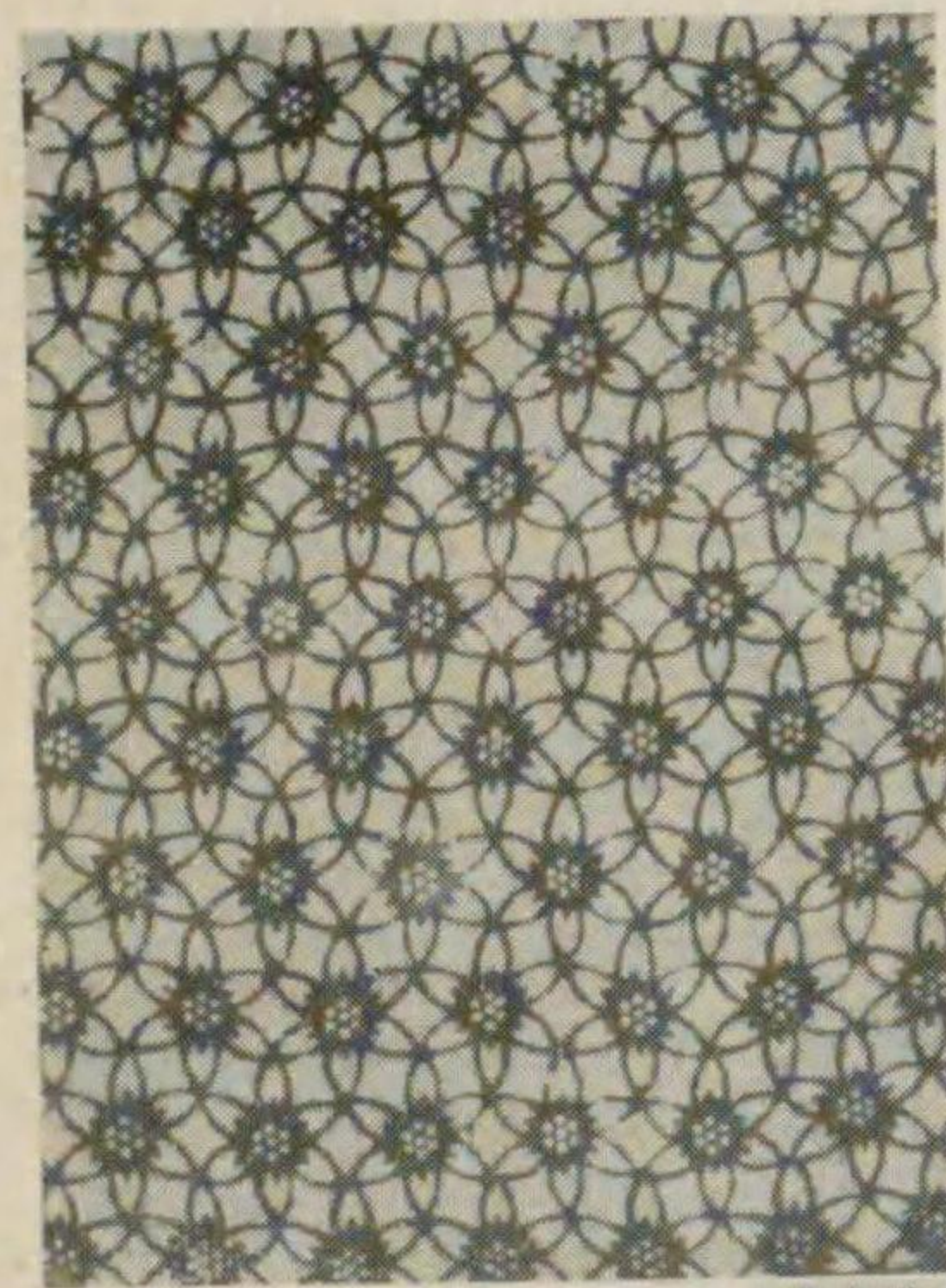
余は八重山の現場は知らないが、仁王は同島の桃林寺にある。仁王は久手堅正肖の創作大濱善巧の補作である。前者は元祿十一年に生れ、寶曆十一年に死んだ人、後者は明和五年に生れ天保六年に死んだ人である。この仁王の作風も江戸中期の作とは思はれない程古調を帶び、よく引きしまつて形が纏まつて居り、日本内地で見る様な街氣満々として俗臭鼻を衝くが如き類ではない。

工藝としては、染工、陶工、漆工等に優良なものが少くない。染工は即ち琉球更紗で、その圖案

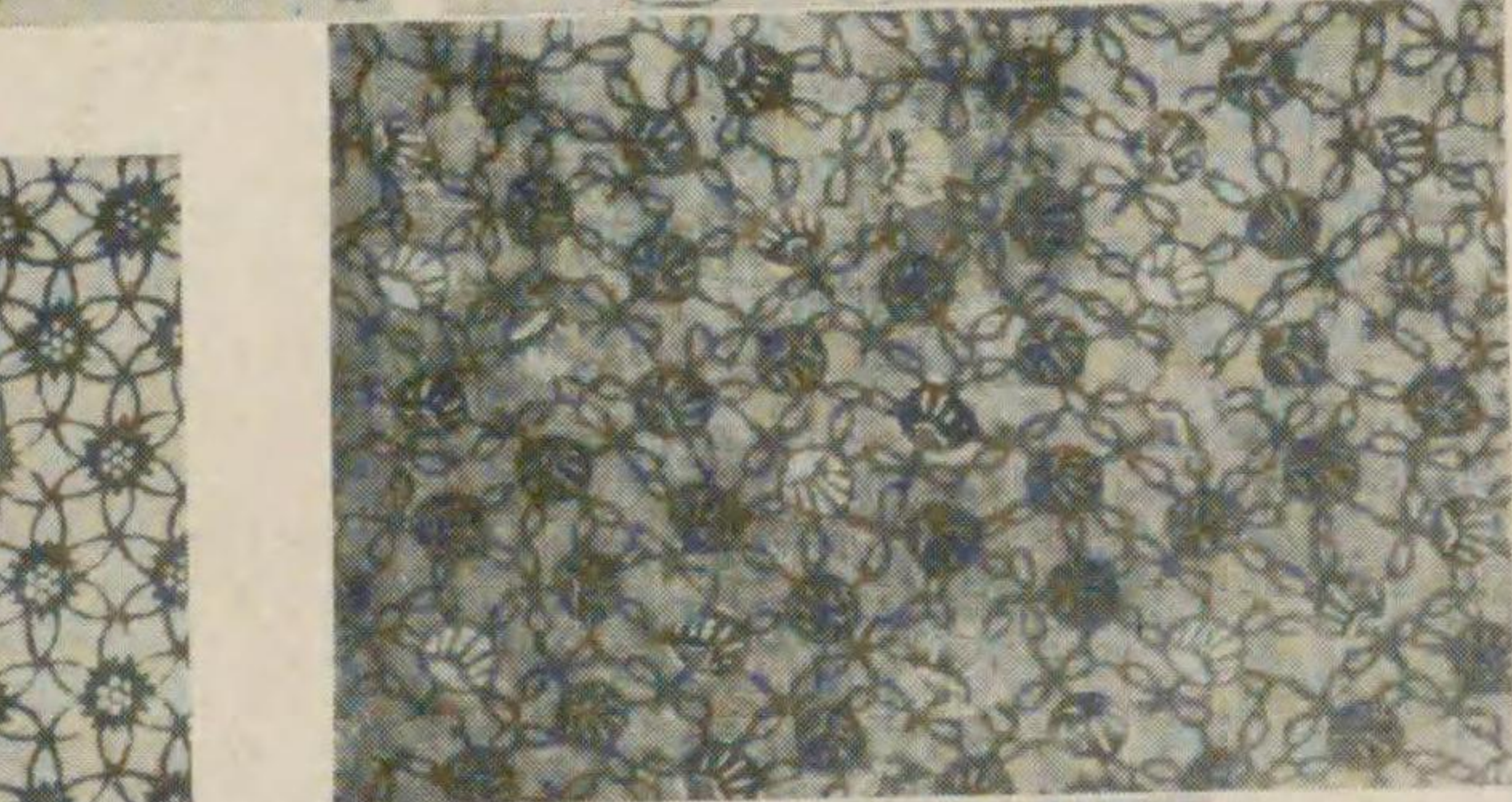
と色の調子が一種特別であるが、夫が例の如く當世流の刺激性のものとは全然その趣を異にし、濃厚であつても少しも悪毒な感を與へない。その氣分は到底筆と口と丈けでは説明出来ない。日本の友禪の起源は琉球にあると考へる説もあるが、成る程と首肯せしむる節もある。

陶工は尙寧王の元和三年に薩摩から陶工高麗人張猷功、一官、三官を聘用して其技術を傳へしめたのが琉球陶工の發達の基である。薩摩の陶工は、慶長四年島津義弘が朝鮮から歸降の技家術を率ゐる來つたので、琉球に聘せられたのもその一部である。これで琉球陶工の系統は明瞭になる。一官、三官は後に薩摩に歸つたが張猷功は終に琉球に止まつたといふ。

其後尙貞王の時に平田典通(寛永十八年より享保七年)と云ふ陶工が出た。彼は寛文十年支那の福州に渡つて研究し、沖繩の土質を調査して五彩の釉藥を發見し、首里城正殿の五彩の墓龍即ち崑吻を始めて多くの作品を遺した。その後尙敬王の享保五年に仲村渠筑登之と云ふ陶工が命を奉じて薩摩に至り星山仲次、林新衛門に就て傳授を受け、又朝鮮陶工の本場なる苗代川に往つて溥龍宮に就て學習し、歸來琉球陶工に一新機軸を出したと云ふ。斯くて琉球の陶工は、朝鮮薩摩系に屬するが、また支那の傳來もあり優秀なる作品に乏しくなかつたが、近頃は技工が甚だ低下して來た。夫れでもなほ一種特



下 三種
小紋染



上 二種
友禪染

琉球紀行

三〇

別の趣味があつて捨て難い處がある。古代の遺品は漸次に散逸して今は容易に手に入らないが、夫れでもまだ隠れたる逸品が残つて居る。聞く處によれば、日本リーバー・ブラザーズ株式會社の取締役社長ジョン・ガスビー氏は英國博物館に送附する目的で、琉球陶器その他の工藝品を買収の爲め琉球に渡り、數千金を投じて古代陶器を買入れたが、彼は東洋に於ける最も生きたる作品だと激賞し、以前は四五十錢位で賣買した古陶器を數十圓で買ひ集めたそうである。鎌倉芳太郎君も負けずに蒐集して居られるから、稀有の珍品をみすみす外人に奪はれることはあるまいと思ふが、結局金の競争になるので、聊か心細い感がある。

漆工は琉球が室町時代に内地と交通した頃、内地の吉野漆を輸入したのが濫觴であると云はれて居る。慶長年間琉球から薩摩に献じた品目の中に支那製漆器があるのを見れば、これより以前に支那の感化があつたことが推知される。尙豊王の寛永十三年に曾氏國吉なる者が貢吏に隨て閩に入り螺鈿の法を學ぶこと三年にして歸國し、その技術を振つたと云ふから、これは當然支那趣味のものである。尙敬王の正徳五年に首里の人房弘徳比嘉乘昌が始めて堆錦塗を發明したが、これが今日でも琉球の特産物となつて居る。この外琉球から隨時支那に行きて銀朱の製法、粉朱及び鍍五色法等を習得した

と云ふ。要するに琉球の漆工は、初め日本内地から傳習し、後支那の感化を受け、終に琉球特殊の新機軸を出したもので、古代のものには中々優秀な作品もあるが、今日は兎角安物を濫造する傾向に陥り、眞に藝術的價値のあるものは極めて稀である。

二十七 普天間と北谷

中頭郡第一の名所で、兼て郡役所所在地たる普天間には、有名な普天間宮が鎮座しましたし、遠近の参詣者は一年中絶へる間がない。余は一日末原學務課長今歸仁縣屬に誘はれてこゝに遊をしてみた、一行は那覇から嘉手納まで通ずる輕便鐵道により、大山驛で下車し、直ちに馬車を驅つて約三十町計り東北に走つて普天間に着いた。

この鐵道は勿論單線で、客車の貧弱なことゝ速力の鈍いことでは恐らくは日本第一流であらう。一時間十哩位の速力と思はれるが、發着の時間も甚だ不確である。線路は略ぼ東海岸に并行して平地を東北に駛るので沿道の風景は中々面白い。爲朝が歸國するとき解纜したと云ふ牧港も窓外に見たが、今は港内の水面も陸地と化して居る。大山驛からの陸路は緩勾配の傾斜を登るので、普天間は恐らくは百尺以上の高地であらう。神社の附近に十數戸の家があるのと、社前の松の並木の參道の傍に郡役

所がある丈けでその外に人家は無い。實に寂寥閑清な靈域である。

一行は取りあへず神社に参詣したが、珍らしくもこゝには鳥居と拜殿とがある。總じて沖繩の神社には鳥居が無い、或は昔は有つたのかも知れぬが今は無い、拜殿もその通りである。但波上宮は最近の改築であるから除外例である。拜殿の後に有名な一大鐘乳洞があるが、その内に降りて行くと小さな本殿が洞の中央に建つて居る。洞は不規則な形で奇々怪々な鐘乳が天井から雜然と垂れ下つて居り、陰濕の氣人を襲ふて冷氣骨に浸る様である。本殿の建築は別に何の變哲もないが、御神體は何等か變つたものであるうと思ひ、案内の社司に開扉を要求した。社司は至つて野堅い老人で、開扉は重大なことであるからと聞き入れない。余は官命を以て調査するのであると説明して強要したが、彼は本省の命令でなければ叶はぬと主張する。余は「自分は内務省の神社局員であるから余の要求は本省の要求と同様であると認められよ」と脅やかしたので彼は終に我を折り、然らば少時御待ちあれと出て行つたが、やがて純白の齋服姿で再び現れ、正式の拜を行つて鞠躬如として御階を攀ち、恭しく開扉した。余は少からず彼の態度に感心し、謹んで拜を捧げ御神體を檢するに、これは三基の石である。形は互に異なるが何れも多少男根に似て居る。多分鐘乳石の塊片を選蒐したものらしい。これ

で事態が甚だ明瞭に解釋された、洞口に立て居る高さ一尺七寸計りの美事な陽石の意味もこれに關聯して居るものと合點される。

神宮の隣に眞言宗の神宮寺がある。今は大破して居るが、約四百五十年前の建築で、柱に大面を取り、上に美しい舟肘木を具へた處なごは確乎したものである。この儘朽ち果てさすのは惜いものである。

余は夫から郡役所へ立ち寄り、郡長から郡治の太要を聞き、附屬の農事試験場を見た。植物の部には琉球産の特殊の草木若干が集められ、家畜の部には牛馬鶏豚羊の五種が飼育されて居たが、餘り規模の整備したものではない様に見受けた。

郡役所を辭して余等の一行は再び馬車を飛ばして西北に向ひ、約三十餘町を距てたる北谷に往つた。こゝには戰國時代に金丸按司が築いたと傳へられる北谷城址があり、その南に琉球第一の名僧と云はれた南洋禪師の建立した樹昌院があり、その境外の森の中に禪師の墓碑があるが、これは小さな自然石に墓志銘を刻したものである。琉球の墓は一般に前章に述べた通りであるが、僧侶の墓は例外であつて、斯の如く墓石を建てるのである。併し余は夫だ琉球に日本内地に於ける多層塔、寶塔、寶篋印

塔、五輪塔の如き纏まつた形式を有する墓塔のあることを聞かない。禪師の如き名僧を以てして、その墓が一小石塊に過ぎないのは甚だ物足らぬ心地がする。禪師は普通北谷長老と呼ばれ、日本に渡つて二十年間遊歴を遂げ、歸來この地に留まり、後光明天皇の承應元年十一月五日に遷化した人である。

北谷の視察を了つた頃は日も漸く西に傾いた。最寄の停車場——と云つても驛の設備はない、たゞ線路の傍に乗客待合の立番所の様な小屋が一つある丈けである。一行はこゝで眩い夕陽を浴びながら定時より數十分間も遅れて來た汽車に飛び乗り、日の暮れ果てた頃那覇に歸着した。

二十八 浦添と中城

彼の百五十時間ブツ通しの暴風雨の最中、或日朝來雨止み風も風いだったので、多分今日は大事あるまいと思ひ、今歸仁縣屬、鎌倉芳太郎君等と共に自働車を驅つて浦添と中城とを見學すべく出かけて見た。那覇から東北に向つて海岸に並行して大道を疾驅して行く間は道も廣く且つ堅固であつた。雨側は滴る様な緑樹が生ひ茂り、清爽の氣言ふべからず、行き會ふ人はこれ殆んど總て村嬢村婦であるが例の芭蕉布の薄衣を裾短かに着なし、多くは帯なしで、かき合せた襟先を附け紐で止めたものもあり、

又は附け紐なしに、上前の襟下を猿股の紐の内に挟み込んで止めたものもあるが、何れも頭の上に大きな籠や箆を載せ、中には蔬菜や果實の類が盛り上げられて居る。時として箆が二重に或は三重に重ねられるが、彼等は巧みに調子を取って歩行くので、決して落す様なことは無い、彼等は朝またき畑からその生産物を採て之を那覇の市場に運び、その賣代を以て自家の日用品を買つて再び我家に歸るので、これが琉球農婦の日課とせられて居る。彼等は片時も早く市場へ行き、片時も早く賣り終つて日課を終へようと思ふのであろう。三々五々打ち連れて、足取疾く勇ましく、朝風に裳裾を翻へしつゝ、何れの屈托も煩悶もなげに、都路さして急ぐ有様は、實に太古の民の倂が見へて、心から嬉しく思はれた。

馳つて横路に入つて坡を上ると、道路は狹隘である上に連日の雨で泥濘踵を没する處があり、進行甚だ困難であつたが、終に道普請の難所に出會ひ、自働車は立往生の醜態を演ずるに至つた。余は「文明の利器と云ふものはこんな物である」と呶きつゝ一行と共に自働車を乗り棄て、徒歩で浦添に着して取りあへず村役場に立ち寄り、役場の吏員に案内を請ふて城趾を見學した。

浦添城は舜天の居城であつたと傳へられて居り、北から西へかけては刀して削るが如き絶壁であり

東から南へかけては急勾配の斜面であり、城壁は今も散々に破壊して居るが、幾重かに區劃されて本丸二の丸三の丸と云つた様な規模が髣髴として追想される。城趾から古瓦が今なほ発見されるが、それは確實に我が鎌倉時代の手法を示すものである。余はやゝしばし城内を徘徊して坐るに古へを偲び壁上に佇立して四顧の風光に見とれたが、やがて導かれて絶壁を北に降りた。只見る一條の細徑は、眞地裏に奈落の底に下るかと思ひ、下り終つた所に大鵬が翼を張るかと思ゆる物凄曲線を畫いた高い石壁が聳えて居る。これ即ち有名なる「ようとれ」の入口である。「ようとれ」とは今墓の意に用ゐられて居るが、元來この土地の固有名である。語原は詳でないが、夕澗の義と解する説がある。「オモロ」に「ようとれ」「あさとれ」などの語があると云へば成る程と肯かれる。澗から静寂の意が聯想され、静寂から陵墓が暗示される。今音便に世衰の漢字が當てられて居るが目出度からぬ文字ではある。「ようとれ」には英祖王陵と尙寧王陵とが相並んで居るが、何れも絶壁に穿たれた横穴式の巨陵であり、四邊の光景は陰々としてさながらに精靈の在すが如く、森閑として自ら神魂の宿るに似たり、陵の傍に古碑がある。即ち琉球最古の在銘の碑で、表に古代の琉文が平假名で刻せられて居る。題して「ようとれのひのもん」と曰ひ、萬曆四十八年かのへさる八月吉日の年紀がある。英祖は自らその墓をこゝに築かしたので、尙寧王は本來首里の王陵に葬らるべきを、薩摩の島津に征服せられたのを耻ぢて故に此所に葬らしめたと云ふ。

なほこの附近に英祖の築いた英祖城と極樂寺との趾も踏査し得ると聞いたが終に訪問の時間を失つた。極樂寺は即ち僧禪鑑の建立した龍福寺で、これが琉球最古の寺である。余は浦添の見學を終り、再び元の道をたぎつて大道に出で、茲にて復たさきの自働車に乗り、一路普天間に到りて中頭郡役所に立ち寄り、所員を嚮導として東方約一里の中城へ行つたが、前刻から催した風雨はこの時遽かに烈しく、中城の西北麓なる喜捨場と云ふ一村に自働車を止めた時は、狂風巖を飛し暴雨盆を覆へすが如くである。されど一行は少しも驚かず、勇を鼓して力足を踏みしめ、暴風雨と奮闘しつゝ崎嶇羊腸たる峻坂を登り始めたが、風伯はいよいよ狂ひ、雨師はますます荒るゝ許り、一行は傘をさすことも叶はねば、全身は濡れに濡れて骨に徹し、一步は一步より苦しくなつた。余の観測によればこの時風速毎秒三十五米である。

一行は流石に避易し、立ち止つて互に澁い顔を見合せたが、何れも瘦我慢の強者と見へて、誰一人引き返そと言ふ者がない。この時鎌倉君はこゝへ兼ねて一行を諫め、「この調子では山上の風雨は思

ひやられる。強行して見た處で視察は出來ず、寫生も出來ねば勞して効は無い。無益の努力をするよりは、今日は一と先づ引き返へし、後日改めて再遊するのが上分別であらう」と發議したので、一行は一議にも及ばず賛成し、再び喜捨場を下つて自働車の中に驅け込み、這ふくの體で郡役所に逃げ歸り、こゝに少時休息して又篠突く雨の中を那覇に退却した。中城探檢は斯くて全く失敗に終つたのである。

中城は海拔五百尺の高丘で、この邊では最高の地點であり、普天間から間道二十五町許り、喜捨場を経て迂回すれば一里強である。喜捨場から城趾までは約半里の坂路で、余等一行の登つた路程はその三分の一であつた。

抑々中城は今を距ること約五百年前、尙泰久王の時勝連半島に據て王位を窺察すと稱せられた權臣阿麻和利に備ふる爲に、琉球の楠公と謠はれた忠臣毛國鼎護佐丸が築いた名城である。城廓は六區に分れ、八門を開き、難攻不落と稱せられた。城趾から東南を望めば中城灣は脚下に瞰取すべく、津堅久高の諸島波間に浮みて、絶景沖繩に冠たりと言はれて居る。

米國のペリーが來た時、彼の一行は中城を訪問したが、ジョンズと云ふ者が城壁を實測した圖が彼の

紀行に載せてある。それに由ると、壁の長さ二百三十五步巾七十步、壁の基底の厚さ六乃至十二步、上部の厚さ十二呎、傾斜に沿ふて外側の最大高六十六呎、内側の高さ十二呎、外壁の傾斜六十度である。なほ彼は壁の構造が理想的に堅實を極めたものであると賞揚して居るが、その挿圖は可なり怪しいものゝ様である。

余が中城見學の失敗を聞傳へた人達は、余に向つて「定めて難義であつたらう」と惱つて呉れるので、余は「否とよ、沖繩名物の暴風雨を親しく體驗し得たことは無上の僥倖である」と負け惜しみを叩いたが、その時の狂歌に曰く、

尋ね來し甲斐もあらしの中城

見ず(水)に歸る(蛙)の飛んだしくじり

二十九 學校と工場

沖繩の諸學校も參觀し度かつたが、時間が無い爲に僅かに縣立工業學校と水産學校だけを訪問したのみである。工業學校は首里市にあり、廣潤な敷地の上に簡素な建物が立つて居るが、四圍の状態が甚だ好感を與へる。折柄校内に工藝品展覽會があり、渡邊校長の親切なる案内と説明とに由つて有益

なる知識を得た。一般陳列品は格別なものでは無かつたが、別室の参考品の陳列は頗る面白いものであつた。その品目は書、畫、彫刻、陶磁器、漆器、染織、衣裳裝束、雜工等で、何れも古琉球藝術の粹を蒐めたものであつた。

核舎の外に古い井戸がある。これは琉球の井戸の制を知るに最も適當であると思ふので、茲にその大要を紹介して置き度い。その形式は圖の如きもので、圓い井戸の三方を厚い石壁を以て圍み、屋根を架けたものであるが、その形が如何にも珍らしく又趣味に富んで居る。棟には獅子が附いて居たのが今は缺けて居る。

水産學校は那覇の港口の南「やら座」に接した所で、最も適當な地點が選ばれて居る。余はその標本陳列室を一通り見て限りなき興味を覺へた。數多の海産物中目に立つたものは幾百種とも知れぬ貝類、珊瑚類、蝦蟹類、龜類、及魚類で、之に加工して食料品としたものや器具類に製作したのものもある。しかし憾むらくは規模が小さい。今少し大規模に經營したならばなほ優良なる製品を得られると感じた。

工場で見學したのは僅かに一人の泡盛醸造所一ヶ所のみである。泡盛は初め南蠻酒と稱せられ、

暹羅から傳來したと云ふ説がある。首里市には醸造家が數多あるそうであるが、余の見たのはその最大なるもの一つであつた。始め米を糖化して麴を作り、更に之を醱酵して濁液を作り、これを蒸溜して泡盛を得るまでの順序方法を一通り見學して少からず知識を得たのである。琉球では昔は薩摩芋から焼酎を作つて居たので、芋焼酎と稱して居たが風味がよくないので漸次に需用を失ひ、今は全く作らなくなつたと云ふ。之に代つて發達したものが即ち泡盛で強烈ではあるが、風味は悪くない。

露西亞のウツカ、支那の燒酒、日本の燒酎に比して優りこそすれ、決して遜色は無いのである。琉球の農工業を通じて最も重大なものは製糖である。大正八年度の産額は二千二百七十九萬圓に上る。泡盛の産額は約三百三十八萬圓、阿旦葉及紙摺の帽子が二百三十五萬圓で、何れも重要物産である。その他織物が三百五十三萬圓、漆器が百四十六萬圓、陶磁器は僅かに二萬九千圓、水産の總額は二百七十萬と稱せられる。

三十 講演會

沖繩縣で施設して居る教育會では、隨時に講演會を公開して居るが、一日余及び折柄來遊せられたる奄美大島出身の露西亞文學研究家として知られたる昇曙夢氏を否應なしに引き出し、那覇の女子師

範學校で例會を開催した。同校の大講堂が會場に充てられ、聴衆は約二百名位で沖繩教育關係者及その他の知名の士も少なからず見えた。會は教育會長末原沖繩縣學務課長の開會の辭に由て開かれ、余は直ちに演壇に立つて一時間の講演を試みた。

講演の要旨は、余は先づ余の渡琉の目的から説き起し、余の調査に關して官民諸士の與へられた厚き援助を謝し、一轉して余の建築觀を述べ、建築は國民思想の徵象であり、文化の代表であることを説き、余はこの見地から琉球建築を觀ると前提した。夫れから琉球建築の分類を試み、之を宗教建築と非宗教建築の二種に大別し、更にその種類を分ち、その類例を擧げて一般の叙説を終り、次に以上の事實から考察して琉球建築に四つの特色のあることを論じた、その第一は夫れが著しく古調を有すること、日本内地に比して必ず常に數百年の時代の喰ひ違ひのあることである。第二は琉球が小さい島國であるに係はらず、その藝術がノンビリとした氣分で少しも萎縮した感じのないことである。第三は琉球藝術が一面に於て特殊の趣味を發揮して居り、精巧であると同時に優美であることである。第四は琉球藝術を構成する元素は多様であつて、日本、支那以外に安南、朝鮮及南洋系の感化があるかと思はれることである。次に論旨を進めて琉球建築は東洋建築の一方の覇を稱する支那系統の建築

の一分派であつて、朝鮮、舊日本、安南、臺灣等と伍すべきものであるが、今まで之を知らなかつたのは學術界の缺陷であつたと説き、これ等の古建築が古琉球の文化を語る歴史的價値の豊富なるものであるから、極力之を保存すると同時に、これを研究してその中から暗示を求め、目下沈滞せる琉球藝術を振興するの必要を力説し、最後に左の一節を高唱して局を結んだ。

「當地方に於ける風習の中で、余の最も感激したのは、各家庭に於て祖先の祀を尊重することである。現今何處でも悪思想が増長し、祖先を輕侮し忘却するの秋に當り、當地方に於てこの美風の存するのは大に吾人の意を得たものと思ふ。併し、若し諸君が祖先の靈を祀ることを怠らない丈けの信念があるならば、何故に祖先が魂を打ち込んで造り上げた遺物をモット尊重しないのか、位牌の前に禮拜することを以て能事とするに止めないで、祖先が遺した古藝術や古趾の保存に盡瘁せらるること

とが必要ではあるまいか、この點に就て特に諸君の考慮を煩はし度い」
余は講演を終つて直ちにまた他の方面に見學に出かけたが、余の次に昇氏の趣味多き有益なる講演があつて、夫は二時間半に亘る長廣舌であつた。これは後に地方の新聞に連載された記事によつて知つたのである。

三十一 冊封使の待遇

高嶺首里市長は、余の爲に一夕慰安の宴を設けて冊封使に對する饗應と同じ待遇を與へられたことは余の最も光榮とする處で、永く之を記念して忘れることが出来ない。席は尙琳男爵邸に設けられ、余を主賓とし、陪賓には昇曙夢氏、龜井沖繩縣知事、その他縣廳の高等官、市役所の幹部、尙順男、岸本代議士、太田朝敷、玉城尙方の諸氏、合せて十餘名、日の暮れる頃から參集し、席定まるや高嶺市長から開宴の趣意及料理の説明、餘興としての琉球古樂古謡の解説があり、やがて持ち運ばれた料理は左の如きものであつた。

古琉球お料理献立表

- 御長皿 燒鳥、みのたる、紅花玉子、いりこ簀付、樺燒鰻、粕平燒、氷はんびん、花生丸
- 御小皿 天水寒
- 同 耳皮刺身
- 同 鴨上味噌いりき
- 一、御膳 (猫足膳) 同 甘煮(蒸花草豆腐)
- 一、膳 同

同 鯉田婦

御吸物 中味煮鳥

御吸物 蒸豚肉

一、同上

御小皿 豚肉、鳥、濱燒鯛、玉子、木瓜、カラシ汁

御皿 櫻鯉、小蝦、三島のり、岩茸、蓮根、金柑

御汁 薄鳥、ツミハ(魚)、松茸、薄牛蒡、ユメ菜、チンピ(金皮)

一、御食膳

御箸寒 豚肉蒲鉾、イリコ、二色ハンピン、竹ノ子、木ノ子、マトウ、川茸、竹糸瓜、柚(ユヅ)

御飯

一、御膳後 丁字餅 西國米

この料理は材料の蒐集と割烹とに少くとも一週間前から準備しなければ出来ないそう、最善最善を盡したものである。餘りの豊富さに余はその一部に箸をつけた計りで、あとは只だ眺めるより外に途がなかつたが、流石に味も甚だ珍美である。泡盛も二百年前の醸造にかゝるもので、得も云はれぬ風味である。間もなく餘興が始まつたが、萬事古風に由て、宴席の前の板敷の廣間を舞臺に充て、電

琉球紀行

燈とうの代かりに燈火とうしを點ともし、夜色やしたの濃こやかなる間あひだに、涼風りやうふうの音ねもなくそよそよと吹ふき込こむ裡うちに、次つぎの順序じゆんじよ

一、琉球音楽

「かぎやで風節」

今日のほこらしやなをにぎやなたてる

つほて居る花の露ぎやたごと

「恩納節」

恩納松下に禁止の碑のたちゆす

戀忍ぶまでの禁止やないさみ

「こしい節」

常葉なる松のかわることないさめ

いつも春來れば色ごまさる

二、女踊(歌)

三、二才踊 上り口説(略す)

四、女雑踊 花風節

「花風ふし」

三重城に登て手さぢ持ちやげれば

早や船のなれや一目ご見ゆる

「述懐ふし」

朝夕さもお側拜めなれそめて

里や旅せめていちやす待ちゆが

五、二才踊 萬歳(略す)

六、女踊 しゆごん

「仲間節」

おもことのおても與所に語られめ

「伊野波節」

あはん夜の辛さ與所に思みなちやめ

うらめても忍ぶ戀のならいや

「恩納節」

恩納松下に禁止の碑の立ちゆす

戀忍ぶまでの禁止やないさめ

七重八重立てるまし内の花も

匂ひうつすまでの禁止やないさめ

「長恩納節」

首里めでいすまち戻る道すがら

恩納嶽見れば白雲のかゝる

戀しやつめて見欲しやばかり

おもかけごつれて忍て拜ま

「しゆとん節」

枕ならべたる夢のつれなさや

月や西さがて戀し夜半

「同上」

わかつて佛の立たば伽召しよれ

なれし匂ひ袖に移ちあもの

七、組踊(略す)

この奏演には樂手も踊手もみな第一流の名家が選ばれた、彼等は古代の服装を着け、古代の樂器を用ゐ、音曲も舞踊も皆古代の式に據つたもので、宛然二三百年の昔に還つた様な氣分である。余は微妙なる音曲諺歌に耳を澄ませ、優雅なる舞踊に眼を輝かせて居る間に、いつしか身は恍惚として古琉球の人となり、宛然冊封使その者になつた様な心地である。

見よ、音曲と諺歌と舞踊と、互にその調子がシツクリと合つて一絲亂れない。一抑一揚、一高一低深きこと千仞の谷の如く、高きこと萬丈の山の如く、迫れば遽々として急湍の如く、開けば洋洋として大海の如し。その音曲は箏、蛇皮線、笛、鼓の合奏で、囁くが如く訴ふるが如く、巨鱗の深潭に躍るが如く、鳳鳥の碧空に翔けるが如し。その諺歌は或は娓娓として絶へざること藕の絲を引くが如く或は凜々として冴ゆること清泉の迸るが如く、靜かに澄めば寂として秋水の如く、高く揚がれば朗として春日に似たり。その舞踊は全身のゆたかなる旋律で、手先き足先きの局部的運動ではない。悠々

たるその態度はわたつみの波のうねりか、天つみ空の雲のたなびきか。妙技にあこがれてや、忍びやかに寄り添ふて舞の裳裾に戯るゝ夕風、妬ましとや毗をしば叩きて明滅せんとする燈火、昔し我が平安盛の世に、月卿雲客が龍頭鷓首の船を泛べて詩歌管絃の樂に短夜を啣ちけんも、實に斯くこそありつらめと想はれて、あはれはいとゞ深かりける。

數番の歌舞の中で、余の最も驚歎したのは「伊野波節」と「しゆとん節」であつた。その態度は何れも能の型であるが、能よりも更に古調を帯び更に莊重である。恐らくは平安朝の舞樂の倂を残すものであらう、殊にその表情は手足の運動に訴へずして全身に訴へる。否全身に訴へずしてその意氣に訴へる。否その意氣に訴へずして只一點の眼睛に訴へるのである。藝術の蘊奥もこゝに至て極ると云ふべきであらう。

二才踊は頗る派手なもので、他の貴族的なるに比してこれは平民的である。昇君は奄美大島出身である丈けに、一入興に入居られたが、やをら起てその郷里の俗踊一番を手振り面白く踊られて満場の喝采を博された。

組踊は一種の歌劇の様なもので、筋は大川仇討と云ふのであつた。複雑であるから茲に説明はしな

いが、内地の能と劇との中間に位する様な氣分である。

古琉球の歌舞音曲は總じて日本古代の傳統であると思れる。支那の影響は殆ん之を發見しない。

余は勿論支那古代の音樂は知らないが、少なくとも近代支那とは全然趣味の異なつたものである。

一同耳と目の修養に由て頭腦を一洗し、盡きぬ餘情を胸に裏んで互に袂を別ち、歸途に就いたのは翌朝の零時三十分であつた。

三十二 收 穫

余は元來至つて物好きな性質で、珍らしいと思つたものは何でも蒐集して見たいのである。今度始めて琉球を見學したので見るもの聞くもの皆珍らしい。従つて見るもの聞くもの皆蒐集して見度いのであるが、夫には莫大な資金と多大の時間を要する。處が生憎資金も時間も極めて貧少であるから、到底目的の達せられないことは勿論であるが、夫れでも極力奮發した上に厚釜敷くもその道の人達に物品の蒐集をねだつたのである。幸にして多數の人達は夫れ々々余の需めに應じて呉られたので思ひの外に多くの有益なる參考資料を集め得たのは實に雀躍の至りであつた。

先づ動物の部では、沖繩縣第一中學校教諭阪口總一郎氏より、エラブウナギ外二種の蛇、巨大なる

蜘蛛二種、蠍二種、蛙二種、守宮二種、蟻一種、地鼠一種、蟹一種（これは八重山産で椰子の樹に登つてその實を喰ふ奴である）貝數種、螺數十種を寄贈され、沖繩縣水産學校よりは珍しい數種の珊瑚、海蟹三種を贈られ、沖繩縣廳よりはハブ一疋を贈られた、植物に關するものでは末原學務課長から檳榔樹の杖外一點を贈られた。

建築關係のものでは鎌倉芳太郎君から數點の古瓦、建築の古圖、寫眞、記録、その他澤山の材料を提供され、眞境名安興氏からも數點の古瓦を贈られた。

宗教に關するものは首里市役所から、民家の門柱に貼付してあつた道教の護符を送られた（第十章宗教參照）この外市役所から陶製獅子二點を寄贈された。

尙順男爵からは特に多量の各方面の參考品を寄贈された。その内容は古瓦數點、古泉若干貝類數百點、煙管二本、平民使用の簪一本、古琉球染更紗四點、浮織形付手拭三點、寶藏と云ふ婦人用蓑入二點、古琉球陶磁器三點等である。

圖書類は沖繩縣廳及首里市役所等から各種の地圖、書籍及多量の印刷物、石碑の拓本數枚を送られ、風俗に關しては鎌倉君から沖繩常用の草履を送られた。

飲料品では諸方より泡盛、エブラ鰻、琉球豚等を送られたが、エブラ鰻は一疋のまゝ堅く干し固めたもので恰も杖の様である。これは非常に榮養價の高いもので、精力増進に特效があるといふ。先年攝政宮殿下が御西遊の途に沖繩に御立ち寄りになつたとき、早速エブラ鰻を御命じになり、御賞味になつたと承はる。

余は歸京の後エブラ鰻の干物を知人等に割愛したが、知人等はその形の恐ろしいのに僻易して誰も喰はうとしない、殊に蛇嫌ひな人は、一目見て身震ひする位なものである。エブラ鰻は琉球近海に特産する海蛇で長さ三四尺位であるが、游泳に都合のよい爲に尾の先が平たくなつて居る外は全然蛇の姿である。これを干し固めたのだから薄氣味の悪い形である。殊にその頭は鋭い眼や深く裂けた口がそのまゝに固まつて異様な凄味を見せて居るのである。知人等は可惜この珍味を試みずして捨てしまつたらしいが縁なき衆生は度し難いものである。

この外なほ尙侯爵家その他から、琉球産織物漆器等の寄贈を受けた。余が自ら蒐集したものは、主に鎌倉君の案内で首里の一古物商から掘出したものである。その第一はウクファンと稱する琉球の王家又は貴族の専用する高さ二尺もある巨大なる堆錦の漆器で、これは

佛前に供へ、又は正月の儀式の節に米を盛り、その上に橙をのせて床の間に置くもので實に美しい形である。夫から蛇皮線、十餘點の新古の陶磁器等を手に入れた。

その他土産物としての漆器や、参考用としての繪葉書や、丈一尺五寸に達する稀代の大法螺——と言つても法螺ではない——その他數種の貝類やまた若干の雜品もある。

斯様な次第で、歸りの荷物はウンと嵩み、随分手古摺つたのであるが、歸京後點檢して見て、まだ欲しい物を取残して残念だと思つたのであるが、さてさて慾には限りが無いものである。

三十三 参考圖書

余の沖繩滞在中是非圖書館を訪問し度いと思つて居たが、終にその機會が得られぬので、鎌倉君は圖書館から若干の圖書を借り出して余の旅舎に届けて呉れた。余は一々目を通す丈けの時間が無いので、たゞその大體を一瞥したに過ぎなかつたが、兎に角その資料の豫想以上に豊富なるに感心した。歸京以後もなほ若干の参考圖書を知り得たが、試みにその書目を列記して見と左の如くである。勿論琉球に關する各種の方面の各種の圖書は汗牛充棟であるが茲には余の研究事項に直接又は間接に關係あるものを選んだのである。

中山世譜	十三冊	雍正三年
同附卷	七冊	
中山世鑑	一冊	
重刻中山傳信錄	六冊	康熙六十年
使琉球記	六冊	嘉慶七年
陳侃使錄	一冊	
琉球國志略	十六冊	乾隆年間
おもろ双紙	二十二冊	自嘉靖十年 至天啓三年
時御双紙	一冊	
によくわん御双紙	一冊	
球陽	二十四冊	
同附卷	四冊	
遺老說傳	一冊	慶安年間
南島雜話		
木片集		

たらなほ澤山出て來ると思ふ。右の内うちでペリーの記録は最も面白いもので澤山の繪がある。ペリー一行が首里城で琉球の大官等と饗宴きやうえんに列する有様な事は甚だ興味ある場面である。

雑誌や新聞しんぶんなごにも有益なる記事が少からず見へる。就中鎌倉芳太郎君が琉球新聞に連載された琉球藝術談や、田邊尙雄君が發表された琉球音樂談りゅうきゅうおんがくたんなごは最も價値に富むものと思ふ。沖繩縣廳で編纂した各種の圖書、各郡役所で出版した郡治に關する冊子等もまた甚だ有益なる參考資料である。

三十四 漫畫攻め

例の百五十時間ブツ通しの暴風雨に祟られて數日間は外出が出来ないので、余はこの時間を利用してノートの整理やら參考圖書の閲讀やらで寸暇も無いのに、人目には無聊に苦しむとでも見えるのか、來る人も來る人も「さぞ御退屈でしやう」と慰めて呉れるのはまだよいが、一つ何か漫畫をと所望されるには閉口した。宜しい承知したと一つ引き受けると、後から後からと引きもきらず殺到して來る。余は蠻勇を振つて片つ端から描きも描いたり、手當り次第の樂書は、我ながら呆れる位なものであつた。

旅館檜原の主人と云ふは、今は樂隱居であるが、頗る多趣味な老人で、畫も描けば遊藝にも通じ、劇作もやれば骨董もいぢる。余は彼の爲に畫帖の一頁を塗り潰した所が、そのお相伴に主婦や女中にまで一々描かされた。

余の外に滞在の客もボツ／＼あつた。多くは商人であるが中には急用で内地に歸らねばならぬ人や宮古、八重山に行かねばならぬ人もあつたが、いつ船が出るとも見當がつかねので、何れも煩悶焦慮して毎日空を眺めては愚痴を零して居た。彼等は終日欠伸斗りしてゴロ／＼と寢轉んだり、烏鷺を戦はしたり、花を引いたり、夜になると何處かへ探検を試みたりして時間を費すに苦心して居た。暴風雨は始め例の石垣島邊から襲來し、先づ東北に向つて沖繩島を席卷したが、夫から漸次に西北に輔じて支那海に去つた。やれ嬉しやと思ふ間もなく、颱風は巨圓を描いて再び沖繩に逆戻りし、散々に暴れ狂つて又同じ方向に逃げ去つたが、聽て又執念くも支那海を一周りして沖繩に突撃して來た。斯くて沖繩は三度颱風の訪問を受けたので、百五十時間ブツ通しとは云へ、實は間歇的に颶風を受けたのである。その間には風力も衰へ雨も止むので、船も今日こそはと解纜の準備をする、旅客にもその旨を傳へる。旅客は行李を調べて出立の用意をすると、又惡風が歸つて來る。これが幾度も繰

り返さるゝので、旅客は行李を閉ぢたり開いたり、行先へ出發の電報と延期の電報を交番に毎日發送する、成る程これでは煩悶するのも無理ではない。第一限ある囊中が不慮の滞在費の爲に缺損を生ずる。由來琉球では斯の如き事情が常住にあるので、旅客の便宜の爲めに特殊なるアングの供給が發達したのではあるまいか。

三十五 琉球傳説 (一)久高島傳説

琉球には興味ある傳説が少なくない、夫は球陽の外傳遺老傳に澤山載つて居るが、試みに茲にその中で最も面白く感じた四話を紹介することにする。その第一は即ち最も有名な久高島傳説である。太古の世に玉城郡百名邑に白樽と云ふ男があつた。至て善良な性で至仁至孝の譽が高かつたので、玉城按司はその長男の娘を彼に妻せた。或る時白樽夫婦は相携へて野遊びに出た處が、遙かに東の方に大海の中に小島の隠見するのを見た。不思議に思つて他日再び野に出て見ると今度は天氣が清朗であつたので、その島は咫尺の間に判明と見えた。白樽は當時國が亂れて年中戰許り爲て居るので厭氣がさして居たので、妻と相談して國を去り、小舟に乗つてその島に行つて見ると、土地は狭いが山は低く野は廣くしかも甚だ豊饒である。夫婦はこゝに家を造つて住ひ、海邊に出て螺貝を拾つて食物と

して居た。或日夫婦は例の如く海邊へ行き、食物豊饒子孫繁榮を祈つて居ると一つの白い壺が流れて來た。白樽が之を拾はうとすると、壺は忽ち波の間に隠れてしまつた。そこで妻は屋久留川でその身を清め、淨衣を着てもとの濱邊へ行き、袖を展開て壺の現れるのを俟つて居ると、やがて壺は復た浮み出でて自ら袖の中に入つた。妻は大に喜んでその蓋を開いて見ると、中には粟三種(一は小麦一は裸麥一は大麥)、粟三種、豆一種(小豆)があつた。それを地に播いて見た處が正月には穂が出二月には成熟した。由て吉日を擇んで之を國王に献上した處、國王は斜ならず歡感あり、之を以て神酒を造つて諸處の御嶽を祀り、次で群臣百工に賜はつた。これより五穀豊饒子孫繁昌したので、遂にその島を久高島と名づけたのである。

白樽夫婦の間に一男一女が産れた。娘の於戸兼は祝女となつて各所の御嶽の祭祀を掌り、長男の眞仁牛は父の後を襲ぎ子孫幾代かの後、外間根人となつたが、その二女の思樽と云ふものが巫女となり、やがて拔擢せられて宮城の巫女となり、宮中に住ふことゝなつた。思樽素より絶世の美人であり起居動作の淑やかなるに國王は深く愛で王ひ、終に召されて王妃となり間もなく懐胎した。王の妾達は深く思樽を妬み何とかして彼を罪に落さんと待ち設けて居た折柄、思樽は或時何とかしけん誤つて

放屁した。悪妾等はこれに尾緒をつけて吹聴し、嘲り笑つたので、思樽も終に居たゝまらず、暇を乞て宮中を引き下り、故郷に歸つたが、その内臨月になつたので、國王の胤を穢た處で産むは恐れ多いとて、別に新しい産室を造り、そこで安々と玉の様な男兒を産んで名を思金松兼と命じた。

思金松兼七歳になつた時、しきりに母に向つて父を問ふたが、母は何とも答へなかつた。八歳になつた時又しきりに父を問ふので、母は、汝は父なくして生れたと云ふと、元來惻愍な幼兒は承知しない。父無くして兒の生れると云ふ法は無いと迫つたが、母はドーしても言はないので、幼兒は終に泣き號び、父の無い子なら世に生きて居る甲斐はない、早く死んで仕舞ひ度いとて、夫れから朝夕食を絶て只だ泣いて斗り居るので、母も不憫さ可愛さに、終に一分始終を細かに語り聞かせ、汝は國王の子とは云へ、かゝる邊鄙な海島に生れて容貌も衣裳も都の人とは似もつかず、たとへ宮中に召されんことを望むとも、そはいかでか叶ふべき、今まで汝に包み隠せしはこの故なりと云ひ聞かせた。幼兒は母の苦衷を聞き分けたが、夫から毎朝必ず濱邊に行て東に向ひ、母上僅かの過の爲に憂目を見玉うことの口惜しさよ、天神地祇願はくば我等母子を憫みて、再び宮中に歸らしめ玉へと丹精を籠めて祈つたが、第七日目に金色の光を放つ物が波のまにまに流れて來た、思金松兼は怪しんで之を拾つて

見ると、それは大きは黄金瓜であつた、天の與へと喜んで家に持ち歸つて母に見せ、早速それを懐に入れて京城へ登つた。夫から直ちに王城へ行つて國王に拜謁を申出た處が、役人共は始め彼の蓬頭垢面で服装の粗末なのを見て、狂人扱ひにして取合なかつたが、彼の態度が堂々として少しも悪びれた處がないのに驚き、定めて由ある者であらうとて、終に國王に奏聞した。彼は王の前に召し出された。彼は恭しく瓜を献上して、さて容を正し、この瓜こそ國家の至寶、世界稀有の珍果である。天甘雨を降らし土已に濕う時、未だ屁を放ちたることなき女をしてその種を播かしめば、よく茂り、實を結ぶこと夥しからんと言上した。王は噴飯して、世に屁を放たざる者があるものかと言つた。思金松兼すかさず語氣を強めて、然らば屁を放つたとて何の咎も無い筈であると詰め寄せた。王は何か思ひ當る様な氣がしたので、思金松兼を奥の間へ連れて行き、その仔細を問ふて始めて思樽母子の八年間の不遇の身の上を知り且つ驚き且つ憫み、直ぐにも母子を宮中に召し寄せ度いが、東海の小島に育つたその姿では人の見る目も如何あらん、やがて時節の來るまで、少時島にて待つべしとて、恩愛の情を割て別れを告げた。

その後國王には世子が無かつたので、思金松兼は終に召されて世子となり、終に王位に即いだが、

王は故郷を偲ぶべく二年毎に一回親しく久高島に行幸せられ、又毎年一回外間根人と祝女とは御仲門から宮中に伺候し、魚類數品を献上し、召されて内院に入て盛大なる饗宴に列し茶、烟草等を賜はるのを吉例としたのである。

三十六 琉球傳説 (二) 宮古島神話

天地開闢の始め、宮古島に男女二柱の神が平良漲水地に降臨してより人物初めて生じたが、その最初の男を戀角と云ひ女を戀玉と云つた。夫れから幾百年の後、平良隅屋地に長者があつて、家富み榮へ何不足なき身分であるが只不足なるは子の無いことであつた。長者夫婦は神に祈願をかけて終に一人の娘を擧げたが、夫は姿色絶倫、賦性慧敏であつたので、諸處から縁談を申し込んで來たが、兩親は深く香閨の中に秘してゐて、何處の縁談にも應じなかつた。

然るに娘が十歳になつたとき、不思議にも懷妊したので、兩親の驚きは一方ならず、娘に仔細を尋ねると、娘は耻と怖に消へも入りたき風情にて、泣く泣く語る處に由れば、或る夜のこと、閨の中に得も言はれぬ香氣が馥郁として漲り、幻の如く一人の美少年が枕頭に現はれた。彼は恍惚として人事不省に陥つたが、それから身重になつたと云ふのである。娘は語り終つて、斯かる耻辱を受けたる

上は、人に合はすべき顔もなし、いつそ淵川に身を沈めて身の罪障を滅すべしと、またさめぐくと泣き伏すを、兩親は慰めすかし、その少年こそ妖怪に極れり、その正體を見届けんとて、針に數千丈の絲をつけて娘に渡し、若しまた少年が來たならば窈かにその首に針を止めよと教へた。

その夜果して復少年が來たので、娘は教へられた通り、針をその首に止めた。少年は夫れとも知らず立ち去つた。夜明けて兩親と娘は針の絲を辿つて少年の跡を追ひ、行き行いて漲水地の洞窟に入つて見ると、そこには幾十丈とも知れぬ大蛇が首に針をつけられながら蠕まつて臥て居たので、一同は魂を失つて驚いた。一行は家に歸つてまた一しきり悲歎の涙にくれたが、その夜娘の夢枕に大蛇が現はれ、我こそはこの世を創建した戀角である。護國の神を立てんが爲に假に汝の胎を借りたのである。汝はやがて三女を産むであらう。その兒が三歳になつた時漲水池の我が棲家に連れ來れと言つて消えて去つた。娘は夢覺めて四邊を見れば寥條として一物も無い。娘は父母にこの事を告げると、父母は悲しみの中にも喜んで、その日の來るのを待つて居る中、月満ちて安々と産れたのは三人の女であつた、その容貌は常人に異なつて氣高く、俊爽の資性洵に神の子に相應しい。三歳になつた時兩親と娘は約束の通り三女を抱いて漲水地の石洞へと急いだ。

只見る幾十丈の大蛇、首は横はつて公藏の垣に在り、尾は掛つて漲水岳の下に在り、眼は蛟星の如く、牙は利剣に似、口を張り尾を掉ひ、身を翻へして躍りつつ一行を迎へたので、一行は肉戦き心裂け、膽魂も身に添はず、三兒を置き棄て、走り歸つたが、三兒は少しも懼るゝ色なく、大蛇の首にまつはり尾に感れる。大蛇は舌を吐いて我子を舐る。やがて大蛇は三兒をつれて嶽中に入り、三兒を封じて嶽の守護神とし、自分は雲を呼び霧を起し、金色の光を放つて天に昇つた。

弘治年間仲宗根豊見が大將軍大里に随つて八重山の保武川赤蜂を討伐する時、この漲水嶽に賽して戦勝を祈つたが、靈驗空しからず八重山に到つて大勝を獲たので、凱旋して歸るとき、嶽の四圍に石垣を築き、内に樹木を植え、その後また拜殿を建て、規模を大成したので、終に海島唯一の壯觀を呈するに至つた。

三十七 琉球傳説 (三) 鬼餅

首里の金城邑に一兄一妹があつた。兄の名は傳はらないが、妹の娘の名が於太と云ふので、妹を於太阿母と云ふ。始め二人は一ツの家に住んで居たが、その跡は今も御嶽になつて居る。その後兄は別居して大里郡の北洞戸に一戸を構へたが、時々人を殺してその肉を吃ふので、村人は大惡鬼と呼

んで怖れて居た。

或る時妹は兄の家を訪問した。折柄兄は家に居らなかつたが、骨肉の間柄であるから、いつもの通り家の内に入つて見ると、竈の上に大釜をかけてその中に何やら煮られて居る。よく見ると人の肉である。妹は驚いて、さては人の噂は眞であつたかと、一散に逃げ出した處が、途中で丁度家路に歸る兄に逢つた。兄は妹を呼び止め「幸ひ家に美味い肉がある、御馳走するから一緒に来い」と言ふ。妹は家に要事があるからとて逃げ様としたが、兄は承知せず、否應なしに妹を連れて歸つた。妹は一生の智慧を絞り出し、懷に抱て居た娘の腿を爪ツたので、娘はワット泣き出した。兄は驚いて「ドーしたのだ」と問ふた。妹は「娘は大便が出たのです。一寸外へ行ってさせて來ます」と云ふと、「イヤ、家の内に便所がある、外へ出るに及ばない。」「イーえ夫でもお腹が悪いのですから、家の便所ではいけません。」「そんなら仕方がないが逃げてはイケない、」斯ふ言つて兄は妹の手を小繩で縛つて出してやつた。妹は毛早く繩を解いてそれを傍の樹の枝に引っかけ、殆んど夢中で逃げ出した。兄は妹が遅いので、怪しみながら外へ出て見ると、妹は遙かに首里に向つて坂を越へて走つて行く、兄は雷の如き大音を擧げて、妹待てと叫びつゝ猛虎の如き勢を以て追つて來た。妹

は匍匐はづが如ごとくに坂さかを越こへて終つひに逃にげて了しまつたが、今いまもこの處ところを等まて川がはと云いひ、その坂さかを生せい死じ坂まと唱となへて居ゐる。

それから程ほど經へて、兄あには首しゅ里りに來きて妹いもうとを訪たづねられた。妹いもうとは一い計けいを案あんじ、兄あにに御ご馳ち走そうをするとて、兄あにを絶ぜつ壁ぺきの岸がし上じやうに坐まらせ、糯米もちこめの内うちに鐵てつ丸わんを入いれた餅もち七こ個こに蒜ひる七こん根こんを添そへて出だし、自じ分ぶんの前まへには米こめ餅もち七こ顆かに蒜ひる七こん根こんを置おき、兄あにに薦すめたので、兄あには何なに心こころなく喰くはうとすると鐵てつ丸わんが齒はに抗こたへて喰くへない。この時とき妹いもうとは前まへの裾すそを開ひらき、股またをひろげて兄あにの前まへに箕きざ坐ざして見みせた。兄あには驚おどろき怪あやしんで「何なんの眞ま似ねだ」と咎とがめた。妹いもうとは「妾わたしの體からだには二ふたツの口くちがあります」と云いひつ、局きよく部ぶを指ゆびさして「下したの口くちでは鬼おにを喰くひ、上うへの口くちでは餅もちを喰くひます」と言いひながら、米こめ餅もちと蒜ひる七こん根こんを喰くつて見みせたので、兄あには仰まご天てんして度どを失うつた機はづみに懸が崖けから下したに眞ま倒たふさに墜おちて死しんだのである。

この因いん縁ねんから、この地方ちほうでは毎まい年ねん十二じふ月げつに吉きち辰しんを擇えらんで餅もちを喰くひ、鬼おにの災わざはひを免まぬかされる様やうにと祝しゆくするのである。金城きんじやう區くでは毎まい年ねん十二じふ月げつの吉きち日にちに鬼おに餅もちを作つくつて神かみに獻けんじ、夫それれを村そん民みん一同どうで吃くふ風ふう習しゆが後のち々くまでも傳つたはつたのである。

この傳でん説せつは琉球りゅうきうに於おいて古いにしへ食しょく人じん種しゆが居ゐつたことを暗あん示じすると同時どうじに生せい殖しよく器き崇そう拜はいの思し想さうを語かたるもので

ある。即すなはち女に根こんに鬼おにを伏おすするの魔ま力りよくがあると云いふ信しん仰やうを語かたるものである。

三十八 琉球傳説 (四) 桑の精

昔むかし眞ま壁かへ郡ぐん宇う江えの城じやう邑いふくに久く嘉か喜き鮫さめ殿どんと云いふ者ものがあつた。彼かれは夜よな夜よな海うみ邊べに出でて漁うしをして家か業げふとして居ゐた。或ある夜よ彼かれは例れいの如ごとく漁うしをして居ゐると、見み知らぬ男をとこが來きて魚うをを取とつ居ゐる。それから毎まい夜よ必かならず同おなじ男をとこが來きて彼かれと一いっ緒しよに魚うをを取とるので、終つひに懇こん意いになり、果はは無む二にの親しん友ゆうになつた。

然しかるにその男をとこは容よう貌ぼうが何なんとなく奇き異いであるのみならず、時とき々く面めん相さうが變かはり、言こと葉はも普ふ通つうの人間にんげんの様やうでなく、住ぢう所しよを訊きいても教をしへない。鮫さめ殿どんは、これは必かならず妖あや怪かい變へん化げに違ちがひない、久ひさしく交まじはつて居ゐては如何いかなる禍わざはひを受うけるか知しれないと思おもつたので、或ある夜よ彼かれと別わかれて家いへに歸かへる振おりをして、窃ひそかに彼かれの跡あとをつけた。彼かれはつけられるとは知しらず、海うみ邊べから奥おくの山やま路ぢに分わけ入いつたが、とある一いっ株かぶの桑くわの樹すの根ね元もとの處ところで立たち止どまつた。そして彼かれの姿すがたはスーッと消きえる様やうに桑くわの樹すの中なかに入はいつて仕し舞まつた。鮫さめ殿どんは驚おどろいて桑くわの傍そばに行いつて見みると、それは幾いく千せん年ねん經たつたとも知しれぬ老らう木ぼくである。鮫さめ殿どんは彼かれが桑くわの精せいであることをつき止とめて家いへに歸かへり、翌よく日にち女によ房ぼうをやつて、彼かれが桑くわから出でて海うみ邊べへ行いくのを見み届とどけさせ、彼かれの留る守すの間あひだにその桑くわの樹すを燒やいて仕し舞まつた。妖あや怪かいは住すみ場ばを失うつたので、夫それから海うみ邊べへ來こなくなつたが、鮫さめ殿どんも

國頭の方へ移住した。

鮫殿は或る時用事があつて首里へ出て来た處が、偶然懇意な舊友に邂逅したので、久し振で二人で酒屋に入り、四方山の雑話の間に飲んだのである。鮫殿は興に乗じて桑の樹を焼いて妖怪を追つ拂つた話をすると、友人は忽ち血相を變へて立ち上がった。彼の顔は見る見る桑の妖怪となつた。鮫殿が驚いて逃げんとする間もなく、妖怪は小刀を以て鮫殿の指の間を刺したかと思ふと姿は消へて見えなくなつた。鮫殿はこの瘡の爲に終に發病して悶死したのである。

鮫殿は宇江邑の屬地なる前原に葬られたが、彼は妖怪の毒刃に觸れた爲に、その肌が鯖のやうになり、形も全く變つて人間とは思はれない様になつたと云ふ。

この傳説は古代琉球に於て、自然物に靈があると云ふ信仰が在つたことを語るもので、格別珍らしい構想では無いが、參考の一端になると思ふ。

三十九 琉球王朝一覽表

琉球の歴史に關しては既に曩きにその梗概を記述したが、茲に便宜上各王朝に分類して、歴代の年表を掲げ、和漢洋の對比を次頁に示して置くのである。

琉球王朝一覽表

王朝	代	姓名	治世	同支那曆	同西洋曆
舜天	1	舜馬	天曆建	元八七	1187..1237
	2	舜義	治仁長	嘉禧寶	1238..1244
	3	舜順	三元元	嘉禧寶	1249..1259
	4	舜本	嘉禧正	嘉禧寶	
	5	舜本	嘉禧正	嘉禧寶	
英祖	1	英大英玉西	祖成慈城威	德大慶元正	1260..1299
	2		文正延正延	大至皇至至	1300..1308
	3		應安慶和元	元四二二三	1309..1316
	4		正延正延正	定德大祐元	1317..1336
	5		應安慶和元	景大至延至	1337..1349
察度	1	察武	正應	至正一〇	1350..1395
	2		平永	洪武二九	1396..1405
尙思紹	1	尙思紹	紹志思達福久應	永樂一〇	1406..1421
	2		紹志思達福久應	永樂一〇	1422..1439
	3		紹志思達福久應	永樂一〇	1440..1444
	4		紹志思達福久應	永樂一〇	1445..1449
	5		紹志思達福久應	永樂一〇	1450..1453
	6		紹志思達福久應	永樂一〇	1454..1460
	7		紹志思達福久應	永樂一〇	1461..1496
尙	1	尙	宣	成化一	1470..1476
	2		宣	成化一	1477..1477
	3		宣	成化一	1477..1526
	4		宣	成化一	1527..1555
	5		宣	成化一	1556..1572
	6		宣	成化一	1573..1588
	7		宣	成化一	1589..1620
	8		宣	成化一	1621..1640
	9		宣	成化一	1641..1617
	10		宣	成化一	1648..1668
	11		宣	成化一	1669..1709
	12		宣	成化一	1710..1712
	13		宣	成化一	1713..1751
	14		宣	成化一	1752..1794
	15		宣	成化一	1795..1802
	16		宣	成化一	1803..1803
	17		宣	成化一	1804..1837
	18		宣	成化一	1838..1847
	19		宣	成化一	1848..1879

四十 歸航

余の沖繩滞在も既に二十日間に満ちた。かねては島尻の南部から國頭の北部までも一と通り見學し度いと思つて居たが、僅かに那覇首里の兩市及中頭の一少部分のみを視察したのみで早くも豫定の期日は盡きたのである。日程を延ばして見残した各地方、重要な離島の二三も見度いのは山々であるが今は如何とも致し難い、いづれ近き將來に再遊を試みばやと心の中に思ひ定め、盡きぬ名残を惜しむつゝ、いよいよ歸航の途に就くことに決心したのである。

出發の前一日、余は首里那覇の兩市役所、沖繩縣廳、尙侯爵家、尙順男爵家等を歴訪して懇ろに別れを告げたが、尙侯爵家では珍藏の家寶數十點を觀覽して感歎時を久しくし、尙順男爵家では幾百點の書畫骨董を視て低徊歸るを忘れた。

八月二十日午後三時、大阪商船會社の安平丸は、いよいよ那覇港を解纜して鹿兒島に向ふと云ふので、數多の人に送られて埠頭に到れば、船に乗る人送る人、幾千人と云ふことを知らず、數町に亘る海岸通は殆ど、立錐の地もない位、千里の波濤を踏んで遠き船路を行く人に、又逢ふ迄の名残とて、互に泣く人笑ふ人、打ちしめる人さゞめく人、浮世の態のさまざまは、面白かりける風情なり。

同じ船で龜井沖繩縣知事、田村産業課長及沖繩諸銀行の重役等も上京するので船内は中々に賑やかである。廳で船内に解纜の信鈴が鳴り響き、しばらくして船は徐ろに岸を離れる。見送りの群衆は船を追ふて殺到する。余は甲板の上に立て次第に遠くなり行く沖繩の島影を見つめて、坐ろに哀別の情に堪へなかつた。安平丸は千六百噸の老朽の小船であるから、風波は左まで荒くはないが、船體の動搖が可なり激しい。余は自慢ではないが元來船にかけては弱卒中の弱卒として殆ど何人にも譲らないので、今日は終日氣分が勝れず、多くは船室の内に平臥して、獨り冥想に耽つて居た。

翌朝船は奄美大島の名瀬に着いたが、この頃から風は全く風ぎ、細漣海面を刻んで華綾の文様を畫くに似たり。余は茲に於て大に元氣づき、知事産業課長等と琉球談から藝術談、歴史談から哲學談、風俗談から經濟談と次第次に脱線して停止する處を知らなかつた。

午前十時頃船は再び名瀬を發し、一路東北に向つて進んだ。往航には真夜中に見ることの出来なかつた七島は左舷に當つて雲烟の間に隱見する。就中諏訪の瀨島、中の島は最も近くして最も大なるものである。波の間から、こゝかしこに「飛びの魚」が躍り出で、海鳥の如く一直線に數十間も飛翔し多くは右に旋轉して曲線を描きつゝ再び波に没するのは頗る奇觀である。日が西海に没する頃から例

の彩雲は神秘的意匠を凝らして大空を裝飾する。余は田村課長と共に心ゆく許りこの造化の大作を仰ぎ見て、驚嘆、讚美心境の廓清せらるるを覺へた。夜更けて余は寢室に入りて安らげき一睡の夢を結んだ。

四十一 鹿兒島

翌朝午前七時安平丸は恙なく鹿兒島に着港した。狭い港内に數多の船が繫留して居るので非常な混雑である。上陸に少からず手間取つて、やがて取りあへず住航の時立ち寄つた薩州館と云ふ逆旅に入つて見ると、福岡の家兄と家兄の許に來て居た余の長男と次男が余の歸着を迎ふべくここに待つて居た。父子兄弟互に健康を祝して歡談一刻、家兄は福岡に歸り、余は二子と共に、櫻島と城山を見學する爲に一日此處に滞在した。

午前にはモーターボートを備つて一里弱の海上を横ぎつて櫻島へ行つた。櫻島噴火の際流出した溶岩が島の半面を黒く彩つた物凄しい光景は、鹿兒島市から手に取る様に見へるが、現狀に往て見ると更に一層の物凄さを感じしめる。山の中腹から海の中まで、廣袤幾千萬坪の燒野原、暗黒色の溶岩は磊々又累々、或は賽の河原の如く、或は劍の山に似て、人をして轉大自然の偉力の不可思議なるに驚歎

せしむる。しかも溶岩の或る部分は、その表面既に分解して土壤を作り、雜草灌木が得意顔に生ひ茂つて居る。

午後は城山見物に出かけたが、先づ島津公を祭神とする別格官幣社照國神社に賽し、境内にある島津諸公の銅像や記念碑を一見し、夫れから城山に登つて公園内を縦横に歩き廻つた後、西郷隆盛の隠れたといふ洞窟や、その終焉の地なごを歴訪し、終りに市中の光景を視察したが、茲に最興味を覺へたのは「獅子吼窟」と拱石に刻したる石門を有する一寺院であつた、石門は石壁を穿ちて石拱を架け棟に二重の獅子を冠したもので、その形式手法は明かに琉球趣味を帯びて居る。必定彼是密接の關係があるに相違ない。又隨所に石牆を周したる邸があるが、これも何となく琉球を聯想せしむる。元來薩摩藩と琉球の關係は歴史上から見ても自明であるが、薩藩には琉球藝術に關する資料が甚だ豊富であると云ふ。即ち琉球研究には必然また薩摩研究が重要事項の一である。余は他日是非共この方面に向つて調査を進め度いと思つて居るのである。

翌朝鹿兒島發の汽車で歸京の途に就いたが、十數個の荷物の處理には少からず閉口した。就中陶磁器類を入れた一個と、アルコホールの瓶漬とした小動物の標本とは絶対に人手に委せられないので特

別の注意を要した、動物標本は箱入りとし、その四面に筆太に毒蛇、悪蝸、魔蝦、妖蜃、巨蜘蛛、飛蟻、邪帆、怪蜃、と書いて置いたので、何處でも見る人が驚き怪しんで氣味悪く思ひ、之に近づくものもなければ觸れるものもなく、斯くて安全に保たれた。

四十二 歸京

七月二十五日に東京を出發してから、丁度一ヶ月目の八月二十五日に余は無事に琉球の視察を了つて歸京した。早速行李を解いて將來した圖書類、参考品やノートの整理に着手して見ると、調べ洩れや、書き落しなごが續々と露れて来る。記憶を辿つて之を補充したり、参考書を繕いて追調したり、琉球に問ひ合せたり、相當の日子と苦心とを重ねて、兎も角一と通り纏めては見たが、自ら省みてなほ甚だ不完全であり遺漏の多いのを知つたのである。

夫れでも琉球に關する概念を得ることが出来、琉球藝術の大體の輪廓を知り得たことを自覺したので、これを世に紹介することが義務でもあり又權利でもあると信じた。そこで先づ第一着に帝大工學部の輪講會で『琉球建築』と題して講話を試みた、次に啓明會の役員會の席上で『琉球藝術談』を試みた。夫れから斯文會の總會でも『琉球建築に就て』を講演し、東洋協會學術部の例會に於ても、『琉球

建築に就て』を講述したのである。

その他余は機會ある毎に衆人に向て琉球を紹介し、請はるまゝに、雜誌等にも斷片的に掲載し來つたのであるが、今回この「科學知識」誌上に「琉球紀行」と銘打つて數回に亘つて連載することを得たのは、余の最も感喜に堪へざる處である。

余は近き將來に於て是非今一度琉球へ行かねばならぬ、そして今回見残した沖繩島の各地方、宮古八重山一帯、奄美大島の一群も視察しなければならぬ。そして幾多の新らしい知識を得て、今回の遺漏又は誤謬を訂正しなければならぬ。斯くて余の琉球研究に一段の改善が加へられねはならぬのである。

終りに臨みて附記して置き度いことがある。夫は曩に紹介した首里城正殿の保存問題であるが、余は當局に建築して正殿を沖繩神社に寄附し、その拜殿に充てて神社建築の一字に轉格せしめた。夫れから文部省に向つて之を特別保護建造物として指定せられんことを出願せしめた。文部省では大正十四年三月二十六七兩日に亘りて古社時保存委員會を開き、之を諮問した處が、幸にして無事に可決されたのである。即ち首里城正殿は政府の特別の保護を受くべき資格あるものと決定されたので、こ

の問題は一と先づ解決したのである。

首里の圓覺寺や那覇の崇元寺なども、その建築的價値は優に特別保護建造物たるに足るのであるが、これは尙侯爵家の私有物で佛寺の臺帳に登録されて居ないから、文部省では之を如何ともすることが出来ない。神社の中にも沖宮、天久宮、その他特別保護建造物の資格充分と認められるものがあるが、これも内地の神社の如き體裁が整つて居らぬので、直ちに保護を得ることは困難である。琉球固有の神祠、例へば園比屋武御嶽や辨ヶ巖の石門の如きも政府にて保護すべき程度の建築であるが、之も政府では特殊の宗教建築と認めて居ない。道教や儒教の建築に至つては所謂社寺建築とは認められないから如何ともすることが出来ない。

即ちこれ等の各種の古建築は政府の保護を受けることが困難であり又は不可能であるから、是非共何等か他の方法に由て保存されなければならぬ。其うちの或ものは内務省に於て史蹟名勝天然記念物保存會の議を経て之を保護してくれるかも知れぬ。重要な橋や碑などもまたこの方面に於て保存され、は洵に幸である。(大尾)

(自大正十四年一月 科學知識 至大正十四年八月)

昭和三年五月二十五日印刷

昭和三年五月二十八日發行

昭和三年五月三十日再版

昭和三年六月五日三版

昭和三年六月十日四版

木片集奥附

定價三圓



不許複製製

著者 伊東忠太
發行者 小竹即一
印刷所 同勞舎活版所

發行所 東京市日本橋區元大工町一二番 萬里閣書房
振替口座 東京七七二〇一番

萬里閣書房發行書目

後藤朝太郎著	支那行脚記	總布木版八度刷 四六版四七二頁箱入	定價二・九〇 送料一四
坂正臣校閱	明治大正勅題歌集	紫羽二重表紙 四六版三八三頁箱入	定價二・二〇 送料一四
鳥居龍藏著	滿蒙の探查	總布表紙 四六版五四五頁箱入	定價三・五〇 送料一六
生方敏郎著 森田恒友裝幀	食後談笑	鳥ノ子木版八度刷 四六版六四〇頁箱入	定價二・九〇 送料一四
後藤朝太郎著	支那阿片室	鳥ノ子木版八度刷 四六版五三〇頁箱入	定價二・五〇 送料一四
清澤洸著	黒潮に聽く	總クロース金文字入 四六版六〇五頁箱入	定價二・八〇 送料一二
東京日日新聞 社會部編纂	戊辰物語	鳥ノ子木版十度刷 四六版三五〇頁箱入	定價二・〇〇 送料一〇
山路愛山選集	(第一卷)現代金權史、現代富豪論 (第二卷)豐太閣	脊皮クロース金文字入 四六版七三〇頁箱入	定價三・〇〇 送料二〇

536

324

